

波と鳥

第23号

2003



室蘭市医師親交会誌

波ノ鳥

第23号

2003

室蘭市医師親交会誌

目次

表紙
カット

加藤 治良
横山 貴康
斉藤 美知子

巻頭言

「波久鳥」有難う・・・・・・・・・・・・・・・・・・斎藤 修弥 1

随想

「波久鳥」廃刊によせて	原田 一洋	3
古希雑感 グレート・マザー	山本 俊一	3
最近考えていること	下地 晋	7
外国船員診療から	東 浩	9
「無題」	大鹿 徳洋	10
私の電脳医療事始	斉藤甲斐之助	11
室蘭市医師親交会さよならパーティー	三村 博通	14
さよならパーティー記念写真	西里 弘二	15
斎藤光史先生との思い出	飯島 三男	16
佐藤東一先生のこと	児玉 直彦	18
偲 上田智夫先生	小玉 俊典	18
国本孝夫君の想い出	加藤 治良	21
洋平先生へ		22

親交会行事略年表	23
親交会在籍者一覧	26

座談会

親交会を振り返って	31
大岩昌生・加藤治良・斎藤修弥・黒光康夫・飯島三男・東浩	

あんらくいす

親交会野球の写真	40
親交会の想い出	41
波久鳥	42
昔、捕鯨基地の室蘭港	42
戦争は果てしなく。	43
最近気になる日本語	44
セブン	44
ホームページの作成	47
近況報告 鹿にぶつかった話	49
私の闘病記	49
近況報告	51
近況報告	52
波久鳥最終号によせて	53
飯島三男	
鴨井清成	
松田史明	
鴨井清一	
後藤正邦	
柳川志公	
柳川譲	
小田切醇	
角哲雄	
堀尾昌司	
開田吉広	
福永純	
塩澤英光	

編集室へのお便り

編集後記	54
齊藤甲斐之助	55

「波久鳥」有難う

室蘭市医師親交会会長 斎藤修弥

「波久鳥」創刊号は室蘭市医師親交会機関誌として、一九八〇年十月十日に発行された。この名称の由来は故長田 廣先生が創刊号のとびらに、次のように説明されている。

「その昔、室蘭の湾は白鳥湾と唱えられた事がある筈です。

白鳥は哀しからずや海の青

空の青にも染まず漂よふ 牧水

医人も又、裡に哀感のある職業です。

惑わされる事なく、毅然たる親交会であれと念じての事です。」

省りみると、室蘭市医師親交会は故斎藤義太郎先生、長田 廣先生、東 栄先生、米澤 堡先生などが中心となって昭和二十七年五月に発足以来、今年で五十一年を迎えている。これまで室蘭市医師親交会は、室蘭市医師会と表裏一体となって前進を続け、永年にわたって親睦旅行、忘年パーティー、会員慶弔、会員表彰等の事業を実施し、会員の親睦と融和に大きな足跡を残してきた。「波久鳥」発刊にあたり、当時の原田一洋親交会会長は、「公報的な性格を持つ室医会報を補完して、会員相互の楽しい対話と安らぎの場になる事を望む」と述べられ、本誌発刊の意義を強調されている。その時から早くも二十三年の歳月が流れているが、これまで本誌の発行に多大な情熱と時間を傾けていただいた歴代の編集委員の先生方並びに事務局の皆さんに、心から敬意と感謝の意を表したい。

この間医療、医師会を取り巻く社会情勢は予想を超えた厳しい地点に到達した。医師親交会もその変化に直面した結果、日本経済の停滞による余剰財源の枯渇と、預金保障制度撤廃などにより運営に多大な困難が生じ、平成十四年度末をもって室蘭市医師親

交会が解散することとなった。

さて、これまでの空間と時間の中で「波久鳥」が果たしてきた役割と功績とは何だったのだろうか。今回の執筆にあたり久し振りに全三十二号を読み返した折、初代編集委員長が第二十号の編集後記に、この問いに答えるような文章を載せていたので紹介したい。

「改めて二十冊ばらばらと頁を追ってみますと、たしかに漂うものがあります。時空間の隔たりを越えた言葉と匂い。それは仲間の誰もがふだん気づかずについて、いつか或る時ふと懐かしむ「グループの体臭」と言っているのではないのでしょうか。硬軟同居、四季の風は吹くままに、それが「波久鳥」なのだと思います。」

（加藤治良先生）

思えば随分長い間「波久鳥」は我々メンバーに、優しい「憩」と「うるおい」を与えてくれた。そのため飛びすぎて少し疲れが出てきたのかも知れない。ここできればらく翼を休め、再び大空に羽ばたく日が近いことを願っている。「波久鳥」有難う。



「波久鳥」廃刊によせて

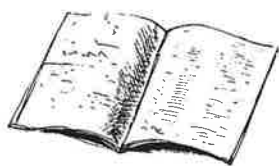
原 田 一 洋

(はらだ外科医院)

室蘭市医師親交会の機関誌「波久鳥」が親交会の解散に伴い廃刊の憂き目に会う事に、20数年編集担当の諸先生方の並々ならぬ御努力により、初期の目的を達成しつつあった丈に、誠に残念に思いますと共に、室蘭市医師会会員の心を一つにした協同事業が皆無に等しくなる事は、非常に寂しい限りです。

今は亡き、上田智夫先生が「最近は何を書く人が少なくなつたし『医史』に目をむける人は誰も居ない」と嘆いておられたが、誰か文才のある人が芽をのばし、「波久鳥」から飛び出してくるのを期待していたのではないかと思うこの頃です。

数ヶ月遅れの備忘録的な「室医会報」も一皮剥いで軽い読み物などを記載して「波久鳥」の跡を継ぐものとして育ってくれたらと思います。



古稀雑感 グレート・マザー

山 本 俊 一

(山本医院)

とうとう波久鳥も今年かぎりとは決まった。残念なことである。まあ止むをえないと思いつつも、つい淋しくなる。加えて私事であるが今年古希を迎えた。今さら古希など平均寿命にも及ばず大した意味がある訳でもないが、やはり己の体力や記憶力の減退、とくに度忘れの多くなつたことに気付かされてしまう今日この頃である。

これまでの人生は、いたずらに馬齢を重ねるばかりで、さっぱり得るところのないものであった。ただ歳月が教えてくれると言うのか、いつとはなく、むかし見えなかったものが今になって見えてきたと感ずることがあるのも面白いところである。子どもの成長にとつて母子関係がいかに大切かということもその一つである。このことは、単なる私の思い着きに過ぎないのかも知れないが、もつと若いうちに気付いていれればずいぶん役に立ったものを、と吾ながら残念に思うことでもある。とりとめのない話に終るかも知れないが、そんなことなどを多少述べてみたいと思う。

※グレート・マザー

最近のテレビ番組に使われている言葉である。ユングのグレート・マザーのことかと思つて放送を見たところ、それとは違

い直訳どおりの偉い母親という意味だけであった。これにたいし本物のグレート・マザーには大へん恐ろしい意味が隠されていると考えている。と言ってもユングについては常識的なことしか知らない。ただ、ユング心理学の元型の一つである Great Mother(太母)という概念に関心をもっているだけの話である。

太母、母なるものとは無意識の底に潜む母親像のことであり、象徴として慈母と怖い母の両方の顔を持つということ。神話や伝説の女神や魔女などはこの太母の現れであるとのこと。初めてこの概念に出会ったとき、この母なるものという考え方に大いに興味を引かれ、それくらい自分なりに何となく理解できたと思ってきた。しかし今になってみると、これは些か早とちりというものであったらしい。なぜなら、ユングのいう太母とは、無意識の内に潜む人類に共通な母なるもののイメージのことを言うのにたいし、私が興味ある母なるものとは主にそれぞれの子どもが心に抱いている優しい母、怖い母というような個人的な母親像のことである、と気が付いたからである。しかし、母なるもののイメージの根源は、それぞれの赤ん坊が母親にたいして感じる優しさや大きさと、同時に余りにも強く依存するために生じる母消失の不安感などがあるのではないかとも思われ、あらためてグレート・マザーなるものの意味を考え直している最中である。とにかく、赤ん坊や幼児にとって母親は最も優しく最も恐ろしい存在であることは間違いないと思う。

ここで、グレート・マザーの恐ろしい面について、具体的に、例えば世間によくある優しい母と良い子の物語、の仮定形で想像しながら探ってみたいと思う。

一般に、良い子とは優しい母の言いつけをよく守り、母を失

望させることを恐れている、と見なしてよいと思う。このようなとき、たまたま子どもの成績が下がったり、受験に失敗したりという事件があると、母は失望し子どもの方もそのことにたいし自責の念にかられることになる。この後の成り行きはケース・バイ・ケースであるが、次のようなケースも考えられる。

子どもが更に努力を続けても、成績は思うように伸びない。それにもかかわらず、母が子どもに尚も努力を求めるケースがある。だが、このとき子供の方は内心で母の望みを果たすことは不可能と感じていながら、未だ母に逆らったり、失望させた経験がないため、そのことを母に言い出せない、という場合も考えられる。そうなると、特にそれまで順調に進んできた子どもの中には、実際に失敗する前に、失敗して母を裏切る予感に怯え、そのために努力が空回りして成績が伸びない、ということも考えられる。このような状態に落ち入った母子の例はよくあることだろう。その後、二人の関係はどう進むであろうか。

この辺りの段階まで来ると、母の優しい顔や励ましの言葉、気遣いの夜食などの行為を子どもはどう受け取るだろうか。優しい言葉や態度を、そのまま額面通りに受け止めることが出来るだろうか。

このような状態の子どもの中には、これらの母の行為が、逆に自分の不甲斐なさ責める筈であるように感じ取る者も出てくるのではないだろうか。しかも、優しければ優しいほど強い筈である。もしそのような子があるとすれば、彼の夢の中で昼間の優しい母はどのような顔や姿で現れるのであろうか。それは決して優しい顔や姿の母とはいえないだろうと思われる。

※母子関係

なぜ、子供は母親の言い付けに従うのだろうか。

本題について考える前に、まず快―不快の問題について述べておきたい。いつであつたか、私は人は無意味なことをしないものだという誰かの言を読んだことがある。たとえば、懲役囚は重労働よりも、軽い労働だが同じ地面に穴を掘っては埋め戻す、というような単調で無意味な作業の繰り返しの方に苦痛を感じるものだという。なるほどと思った。だとすれば、人間の行為には全て何らかの意味があるに違いない。その意味とは何だろうか、と考えてたどり着いたのがいわゆる快不快の原則である。以来、私はことがあると、人の行為を快を求めるための行為か、それとも不快から逃れたり予防したりするための防御的な行為か、自己流に分けて考える癖がついた。では、何をもって快不快とするかという新たな問題も出て来そうだが、この点は私の勝手な解釈でお許し頂くことにして、飢えれば食すなどの生理的快不快を除けば、人は一般に快を感じる行為や行動に際して、楽しい、好ましい、時のたつのが速い、疲れが少ない、従っていつまでも続けたいと感じる場合が多いと言えそうであり、不快を感じる行為行動には、災難を避ける、食うために働くなど生きるために必要な予防的義務的行動などが考えられ、これらの仕事には一般に嫌い、時の経つのが遅い、疲れやすい、早く仕事を止めたいなどと感じる場合が多いと言えるのではないだろうかと思う。

これをもう少し細かく分けてみると、快には出世や金儲けなどの世俗的な快、いわゆる遊びとしての快、美や真の探求の快など無限に求め続けることができる快と一度失った健康や名

誉、財産を取り戻すなどの有限の快とに分けて考えることが出来そうである。また防衛的予防的行為には、何々せねばならぬという義務的行動や何々してはならぬなどの禁止行動が考えられ、その通り行動することにより後悔や罪悪感という不快感や被害を避けることができ、同時に安心感という快感ほど強くないが安定した気分を得ることができる。この快不快の意味や価値は何かという点、快追求は楽しいだけでなく、ときには富や名声などをもたらし個人人のQOLを上げたり、ときには世のためになるような創造的発見の原動力となる。それに対し不快防衛は個人のQOLの水準を維持するために是非とも必要な場合が多いと言えそうである。このように考えてみると、人も動物も生きて行くためには防衛的行為や行動が重要であり、快追求はむしろ二次的行動であると言えそうである。しかし人間にとって、快のない人生はない、と誰もが思わざるを得ないのが快と言うものではないだろうか。この快不快の線から赤ん坊や子どもの行動、とくに子どもがなぜ母の言い付けに従うのかという問題の意味を探ってみたいと思うのである。

人間の赤ん坊はほとんど本能を持たずに生まれてくる。しかし、本能を持たないのには、持たないだけの理由があると思われる。彼らは完成した適応行動としての本能の代わりに、母親だけを頼りに環境変化の激しい世界を生き残れるように生まれてきたに違いない。この母親頼みということこそ母子関係の鍵ではないかと私は考えている。

赤ん坊は生後六、七ヶ月になると分離不安や人見知りの行動を見せるようになる。このことは、それ迄の腹が空いたら泣き腹満ちれば眠るだけの受動的な生活に対し、母や周囲の人たちを

見分ける知恵や這い這いする運動能力も出来てくる頃でもあり、いよいよ、彼らの方から積極的に行動する時期が来たという意味に解釈している。

赤ん坊は好奇心が旺盛である。知力の発達は身の周りに次々と新たな発見を呼び、その発見はさらなる知識と知力の発達をもたらす。それと平行して運動能力も発達し行動領域も自然に拡がっていくのであるから、気分が快であるのは当然である。彼らの生活は昨日迄の不可能が今日は可能という日々の連続であり、気分は快を越えてむしろ躁と見なしてもよいかと思われる。また、この時期の彼らはいわば、未知の世界に踏み込んだ好奇心たっぷりの探検家にも喩えられるだろう。そのため知恵のついてきた赤ん坊は好奇心だけでなく警戒心や恐怖心も強くなり、未知の恐ろしそうな事物や人間の存在に気づくことも多くなる。そのような彼らの心の表われが分離不安、人見知りであろう。だが、いつも側にいる母親がこの探検家の案内役と守り神の役を果たしてくれるので、不安や恐怖はすぐ消える。このように考えてみると、赤ん坊や子どもは誰もが母親が側に居てくれさえすれば快的で安心な日を過ごせると推測できるだろう。しかし、彼らがこの世界で本能に代るほどの適応行動を獲得するためには、気紛れな好奇心や警戒心に頼るだけでは不十分であり、他に何らかの有効な方法をとる必要がある。その方法としては、いつも一緒にいる母親の行動をそっくり模範することが最良の方法であるに違いない。では、その模範をどのようになどの程度まで行なえばよいか、という問題が生じてくる。

模範といっても様々あるが、この場合の子どもに必要な母親模範とは、ほとんど無いに等しい本能の代りとして短期間に母

の行動を一通り全部模範することであるのは言うまでもない。だが、母親に知力、体力、経験などで格段に劣る赤ん坊が最初から母親の行動を完全に模範することは無理である。そのため彼らは先ず、行動の表面的な形だけ真似することから始め、成長するにつれて次第に行動の意味や価値を理解するようになるものと思われる。それ迄子どもは遊びなどの形で母親の真似を繰り返し、一方、模範の不十分なところを母親の注意や指示に従うという形で補正している。このように考えてみると、子どもが母親の言い付けに従うことは完全な模範を行なうためにぜひ必要なことである。換言すれば、よく母の注意や禁止に従う子ほど模範の完成度は高く、そのような子どもほど生存競争に有利であると言えそうである。この模範過程を快不快の線から推測してみると、面白い楽しいと感じる部分もあるだろうが、子どもにとり、よく意味の判らない行為を繰り返し真似したり面白そうな行動を禁じられるなど、とても快とは思えない部分が多く、むしろ、真似せずにはいられないとか何々してはならないという強迫的あるいは禁止的な部分が多すぎるように思われる。だから、子どもにとり母親模範は快追求よりも出来れば早く止めたいと感じられる不快予防的部分が強い行為である、ということになるだろう。

したがって、子どもの母親にたいする気持は、成長すると共に身近に怖いと感じるものが少なくなることもあり、次第に分離不安から自由願望に移り変わるのが自然である。あるいは、子どもは、いずれ、いつまでも子離れできない母親の要求と次第に大きくなる己の自由の願望の板挟みになる運命にあるとも言える。

これまで漫然と母と子について私の感じてきたことを述べてみたが、世の母親たちは赤ん坊の自分にたいする愛着と服従の態度をどのように見ているのだろうか、いつまでも自分に服従すべき僕であると思ひ込んでいるのではないだろうか。しかし私は、しいて言うならば、彼らは人間見習のため母の許に生まれてきた弟子であると思う。それも早く見習を終えて好きなことをしたいが、出来ればついでに母親の望みも叶えてやりたいと考えている弟子である、と見た方がよいのではと思っている。だが、赤ん坊にそのような希望や思い遣りがあるはずもない。本当のところは誰にも謎と思うが、彼らには母親に服従せざるを得ない何か理由があるに違いない。その理由として、母親の指示や命令に背いたとき独りでに不快な嫌な気分落ち込む自罰的な心の仕組みが在るのではないだろうかと思像している。そして、その仕組みとは、母に背いた子どもが無意識の奥底から浮かび上がる怖いグレート・マザーの顔ではないだろうか、と。

余談

この原稿を最終的に点検している時、偶々グレート・マザーの放映があった。この度の番組内容は冒険スキーヤーの三浦雄一郎氏とその母の物語である。当時、母方の祖父は東北の有力代議士であった。氏は旧制中学の入試に失敗し敗北感のため十日余りもの間、押し入れに閉じこもってしまったそうである。そのとき少年に押し入れから出る元気を与えた母の一言を引用させて頂く。

ある日、母は笑顔で言った。

「あんたのお祖父さんに比べたら、まだましだよ。選挙に落

選することを思えば」

「中学受験の一回や二回の失敗なんか、どうつてことないさ。選挙に落ちたら四年は浪人しなきゃならないんだから」少年は外へ出た。光がまぶしくて、目がクラクラした感じであった。

ユングの心理学に同時性の原理なるものがある。「意味のある偶然の一致」だそうである。

最近考えていること

下 地 晋

(下地外科)

医学雑誌の「私の診療室」に、加藤治秀先生の水平足踏み法による老人の健康管理という論文が載っていたので読んだが、その症例をあげてみると

年齢97才男性 病名…高血圧症、虚血性心疾患、
発作性心房細動

83才男性 病名…高血圧症、心房細動

76才男性 病名…高血圧症、虚血性心疾患、
不整脈、発作性心房細動

74才男性 病名…高血圧症、心肥大

72才男性 病名…心肥大、発作性心房細動

等、その他症例はあったが、これらの患者に前記の水平足踏み法をおこなって、全例が良好な経過をとり、症状が改善したという。この論文を読んで私は直ぐには信じられなかった。その水平足踏み法とはいたって簡単、立って手を大きく振って膝を略水平になるまで左右交互に上げて、左右足の上下運動を一回として数え、それを一日に一度に300回おこなうというものである。云うは易しく行なうは難しで、勿論初めは誰にでも可能なものではなく、一日に一度10回、20回程度から初めて次第にその回数を増していくという。朝夕2回に分けてやってもよいが、1ヶ月も続けると100回位は1度にできるようになるそうである。2ヶ月で200回と慣らしていき、結局は1日に300回を行なわせるというものである。因みに加藤先生ご自身では3〜5分間に300回をこなせるようであるが、70才を過ぎた平均的な老人が、3〜5分に水平足踏みをするのが果たして可能なのか、数年前に別な雑誌でも同様の健康法を読んだ記憶があったので、一度試してみた事があったが、私は50回くらいで足は棒のように重くなって、運動が続かなくなり、おまけに腰痛まで出てきたので止めてしまった事があった。しかし私も75才近くになって、この水平足踏み法を今一度継続して行ないたいと思っているがいつからにしようか、年寄の冷水なのかどうか。

数年前に家内と札幌に行った時に本屋のエスカレーターのおどり場で、一寸脇見をしていたたらを踏み、右膝を強く捻ったことがある。その時に右膝内側かなりの痛みを感じたので靱帯の損傷をうたがった。帰宅してから歩行痛と圧痛があった。翌日になって右膝の腫れと屈伸痛が強くなってきて、しゃがむ事が困難になった、また下腿全体も少しむくみのように

少々腫れが出てきた。その状態が何ヶ月か続いたが、湿布鎮痛剤でごまかしていたが、少しずつよくなっていた。人の体内運動機能は全身が関連しており、私の場合は膝から腰、運動が強ければ心肺にも影響してくるようであった。私もそろそろ高齢層であり、今では私の唯一の運動で楽しんでいたゴルフの回数も減らさざるを得なくなった。下手の横好きですっかり止めてしまう気にはなれなかった。だがゴルフをして気になるのはパートナリーに迷惑をかけているのではないかと意識することであった。いつも最後尾でパートナリーの背をみて歩いていた。私は室蘭の白鳥コースに行くのが殆んどであり、コースは林間コースで以前は気付かなかったがNo14は当然ではあるがNo3、No9、No18も登りなのだということに気付いた。同伴者にNo17のようなホールが18ホールあればいいな等といった笑われた。又「カートを使ったらどう？」とも言われたが、あれはまだ嫌である。最近になってやと脚、腰、もよくなってきたので、前記の加藤先生の水平足踏み法を今一度やってみたいと考えている。道具は何にも要らない。根気が私にあるかどうか判らないが1日1度100回でも欲が出たら200回と次第に増加していきたい。論文を読んで症例に悪い結果が出ていないようなので近い内に始めようと思うが三日坊主になるかもしれない。

外国船員診療から

東 浩

(室蘭船員保険診療所)

平成十五年三月三十一日、室蘭船員保険診療所を退職した。三十八年六ヶ月の長期間を曲りなりにも勤務出来、改めて周りの皆様に感謝している。船員診療所といっても殆どどの受診者は船員以外であり、他の医療機関との違いはないが、多くの国籍の外国船員を診療してきたので、そのなかから思い出に残っているものを述べてみたい。

「結婚式への招待」

インドのボンベイからDSILVAの手紙がくる。一九七二年四月三十日の結婚式とレセプションへの招待である。二等航海士の彼は室蘭船員診療所で、右そけいヘルニアの手術を受けた。経過良好で元気で船員生活を送っている由。折角の好意ながら出席は出来ない。祝電をうつ。それにしてもインド人の結婚も日本人とあまり変わらない。DSILVA家の息子のMARRSHALとTHOMAS家の娘FELUMENAが、午前八時三十分から教会で式を挙げ、午後六時三十分から彼女の家でレセプションを開催するというものであった。花嫁の家でパーティーをするのが日本と違うかもしれない。

律儀な彼はその後も毎年クリスマスカードを送ってくれた

が、平成十三年、彼の長男の結婚式のお知らせを戴く。改めて長く務めた実感が湧く。

「T看護師の恋」

七月最後の週、室蘭港祭りのメイン行事の花火大会が、数年前までは、室蘭船員診療所の前の中央埠頭沖で行われていた。個々のスポンサー名と花火の愛称がマイクを通して放送されるが、観客は花火を楽しんで誰も聞いていない。

昭和四十年、ギリシア船員Aは急性虫垂炎を悪化させ、腹膜炎で入院手術を受けた。約三週間で退院したが、その時AはT看護師に恋をした。男女の関係は言葉は十分に通じなくても用をなすが、詳細なことは私が間に入って、英語で話し書くこととなった。シラノ・ド・ベルジュラックの室蘭版である。大きな目の外国人好みの彼女は彼の結婚のプロポーズには、戸惑いながらも感激したが、外国での生活の不安、船員という職業、そして何よりも言葉の障害と習慣の違いなどに悩み、結局断った。彼はあきらめず、船員をやめる、家事はさせない、日本へはいつ帰ってもよい、彼女の家族の面倒をみるなど。愛の告白は古今東西を問わず同じである。

退院時、彼は男女一対の胸像(銅製品)の男性像を主治医の私に、女性像をT看護師へプレゼントしてくれた。TOUTANKHAMOUNと書かれたこの置物が、当時は何かわからなかった。二年後、朝日新聞社主催の「黄金のマスク・ツタンカーメン展」が東京で開催された。そこで、この胸像と全く同じものを見た。レプリカとはいえ、この像は彼にとっては貴

重なものであったことが、わかったのである。病室には、T看護師が折った千羽鶴が残っていた。「MY LOVE IS CRYSTAL VIOLET TO Miss, T」鶴の羽に書かれた愛の言葉だった。

この年の港祭りの花火大会に、室蘭船員保険診療所は参加した。もちろん花火の愛称は「クリスタル バイオレット」である。T看護師にだけはマイクを通してこの言葉は聞えた筈である。

室蘭市、室蘭船員保険診療所をとりまく諸情勢は、その後著しく変り、診療所は現在は無床で、室蘭港の栄枯盛衰とともに、外国船員も少なくなり、東南アジア系の船員が、時々受診する程度となった。ひよっとしたらベツカム様に会えるかもと思つて就職した若い看護師達の夢を裏切っている。

恰かも、平成十五年三月で室蘭市医師親交会が長い歴史を閉じた。私の退職と同日だったことも、また何かの因縁かもしれない。

「無題」

大 鹿 徳 洋

(大鹿耳鼻咽喉科医院)

室蘭に移り住んでから四十三年になった。時は飛ぶように速く過ぎ去った感じがします。約十五年間の勤務医生活(現新

日鐵室蘭総合病院)を経てここ母恋で開業してからもはや二十七年になった。

若い頃は未来にいろいろと夢をもっていたが、ほとんど中途半端に終わってしまいました。そして、この年になると過去をふりかえることが多く、特に小学生の頃の生活を思いだす。生れ故郷は十勝の片田舎の足寄(今では松山千春や鈴木宗男代議士のおかげで少しは知られるようになった)というところで、ここは木材と農業の町でもあるが、町は、東は阿寒国立公園、西は大雪山国立公園に隣合せており、東西六十六・六km、南北四十一・三kmの広大な町で、この広さは町村としては国内では最も大きい。また、ここには利別川、美里別川、足寄川があり川に沿って開拓された農耕地は六・二%にすぎず、大部分は山麓地帯であった。この様な環境であった為、子供の頃は、よく父につれられて溪流での「やまべ(山女)」釣りに出かけた。釣りに夢中になり風邪をこじらせて半年ほど学校を休んだこともある。

勤務医時代は飲みに出かけたり、マージャンばかりしていました。たまにゴルフにも行っていたが、さっぱり上達せずまた手の皮膚炎に悩まされいつのまにか止めてしまった。

開業しても生活は一変したわけではなく、相変わらずマージャンはしていたが、雑用が増えるにつれ自然に止めてしまった。開業のあくる年に娘が生れたばかりの猫を拾ってきた。その後友達からもらったりして結局三匹の猫にふりまわされる生活が始まった。猫は気まぐれで、三匹が同じ行動をとることはほとんどなかった。しかし、この八月二十三日に三匹目の猫が老衰死し、やっと猫から解放された。ちなみに「ニコ(二十三年

生存」「コロ（二十一年）」「チビ（十九年）」とみな長命であった。「コロ」は体重は優に六kgを超え、とにかく人が好きでドア・チャイムが鳴ると人間より先に玄関へ飛んで行く。また知らないうちに患者さんと一緒に医院に入り込み待合室でデーシと寝転がっていて、かつて患者さんから医師会事務局に苦情の電話がきた猫である。最近ではペットブームでペットを飼う人が増えている。特にテレビのCMに登場している「チワワ」の人氣が高いという。最近はこのペットシヨップでもこの犬をみかける。あらためてテレビの影響に驚いた。

ペットと暮らすということは、その動物の一生に責任を持つということ、かわい子時代から大人への成長、そして年老いて別れる日までその世話は大変である。反面、ペットと暮らすことで喜びを与えてくれたり、心がなごんだりすることも少なくない。

ところで、「敬老の日」にちなんだ総務省が発表した統計調査によると、五人に一人が高齢者（六十五歳以上）で道内は全国平均（十九％）を上回る十九・七％であった。ちなみに室蘭市は二十四・六％で、道内十万人以上の年では小樽市の二十四・七％に続いて二番目に高かった。二〇一五年には六十五歳以上は総人口の二十六・〇％を占めると見込まれている。日本の高齢化は急速に進んでいる。これから医療費、年金に対する論議が一層高まるのは必至と思われる。

私も最近では年齢相応に氣力、体力ともに低下し、老眼も進みまた物忘れが多くなってきた。これからは日常の嫌なことをできるだけ忘れるようにし、一日のストレスをその日のうちに取り払って生きていきたいと思っている。

私の電腦医療事始

齊藤 甲斐之助

（若草内科クリニック）

科学少年であった私が医学を選んだのは以前にも書いたように物理学に馴染めなかったためなのですが三つ子の魂百までの例えどおり医者になったあとも機械好きはどうしても止めることが出来ません。医者らしい給与を手にするまでと直ぐに今から思えばおもしろいようなコンピュータを早速購入したのです。学生時代に流行したインベーダーゲームはからきし駄目な私でしたがこの最初のコンピュータは留学先のニューヨークにも無理やり持ち込んだ統計分析に英文ワードプロセッサにと随分と活躍を致しました。

十七年前に医院を開業した当時に導入したのはNECの国民機PC98ですがメインメモリ1MBに満たないこのマシンを十年近く使い続けたものです。その頃には裏技を使ってこのシリーズのコンピュータ七、八台で院内LAN（ネットワーク）を構築して医療情報の管理を行なうに至ります。まさかと思われるかも知れませんが私の部屋にはまだこの当時のマシンが一台生き残っていて職員の給与計算に現役で使われています。

さてウィンドウズが出現しコンピュータの能力が飛躍的に向上したことに伴い私の医院のシステムも更新を余儀なくされるのですが古くなった私の頭は新しい技術を容易には習得できません。苦しい紛れに室蘭工業大学の情報工学科に助けを求めたところから私のコンピュータ物語は新しい展開を迎えました。

その頃までに実現させていたのは処方管理、薬剤の在庫管理、予約スケジュールの管理等々でした。私が自分で作り上げたこれらのプログラムをウィンドウズに移植する事を大学院生のF君に依頼したのです。私は医療情報の全面的な電子化、電子診療録について彼と夢を語り合いました。私は夢と思っていたのですが、U助教授の下にいたF君は「先生、それやりましょう」と言い出しました。一人では絶対に無理だから何人かでプロジェクトを組まなければ出来ない事だからと説得したのですがF君はたいへんな才能と情熱の持ち主で紆余曲折の末に信じられない事に電子カルテを作り上げてしまったのです。

当時すでに電子カルテはいくつか実用化はされていましたが我々医者からするととても使えた代物ではなかったのです。自慢する訳でもないのですがF君開発の電子カルテはプログラムとしてのデザインがとても秀逸で使いやすさという面から言えば現在でも十分に通用するものであったのです。

さっそく名古屋大学で開催された情報処理学会で発表しました。医学系の演題は少なくて大学の小さな講義室が会場でしたが同じセッションでサンヨーの連中が何やら情けないものを発表して下を向いていたのが今でも思い出されます。サンヨーメデイコムから電子カルテが市販されるのはそれからやや暫く経ってからの事でした。

さて、優秀なF君は社会人となつて室蘭を離れてしまします。残念ながらというか当然と言うべきか医事会計にまでは手が回りません。事務員は普通カルテを見てレセプトコンピュータに入力をするのですがこのシステムでは電子カルテの画面をみてレセコンに打ち込む訳です。どうにもかつたらしい。自院でこの

電子カルテを運用しながら当時使っていた沖電気のリセコンの連中に見せてはさらなる開発に乗らないかと誘いをかけ、これをやらなければあなた方の未来はないのですよと脅しをかけてたのですが連中どうしても乗ってきません。こうして電子カルテの開発は中断を余儀なくされます。

ところでF君との開発でどうしても手をつけられなかったことは医療画像の管理でした。その頃100GBを超える外部記憶装置を備えたメーカー製の画像ファイリングシステムは融通が効かないくせに恐ろしく高価であったのです。F君の後を継いで当院に来てくれたK君、彼は真面目な好青年でしたがデザインセンスではF先輩にはかなわないということがすぐに分かりました。私は彼に地味ではありますが日常の診療に非常に役に立つであろう画像ファイリングシステムの開発を託したのです。すでにDICOM規格は標準化され大金持ちの大病院では稼動していましたが診療所にそんな物は要らない、と私は考えたのです。診療所では患者さんごとにレントゲンの袋を作つてその中に写真や心電図を保管しているのだから同じ物をコンピュータの中に作れば良いと考えたのです。

まず患者さんごとに一つの袋を用意する、その中に胸部写真、腹部写真、心電図、胃バリウム、胃内視鏡といった医療画像の種類毎に子袋を作成する。各々の子袋の中には撮影日時ごとに更に子袋を作成しその中に医療画像を保存しておけばどの患者さんのどの種類のいつ撮影された画像であるという事が分かる筈です。これらの一連の動作を管理するプログラムを作成すれば良い、そう考えたのです。専門家が眉をひそめる独断と偏見に満ちた私の医療画像ファイリングシステムはこうして完成しました。

出来あがってみれば、患者さんを呼び出せばその患者さんが何時どのような検査をしているのかが一目で分かり、マウスのクリックでどんなに古い画像であつてもほんの一瞬で参照できるといふことに便利なシステムなのです。

こうして私の医院では事務員でも看護婦さんでも手の空いた時には昔のレントゲンやら心電図、眼底写真、内視鏡フィルム、患者さんが持参してくる健康診断結果、紹介状等ありとあらゆる情報をスキヤナで入力するという作業を開始したのです。スキヤナにはエプソンの大型のものを使いレントゲン写真もきれいに取り込める透過原稿用のオブションを装着してあります。

開業以来増えつづけ医院の廊下にあふれ階段の踊り場に積み重なり悪性腫瘍のように職員の休憩室を侵害し、もうどこにも行き場所を失いつつあった診療録やレントゲン写真が、ある日を境にその恐ろしい増殖を停止し、のみならず日に日にそのサイズを縮小させ始めたのです。これは見えていて本当に愉快なものでした。こうして大学院を修了したK君も横浜へと旅立ちしばらくの間私は新しい事には手を出さないといいかネタがなくなつてしまい放心状態となりました。

これらのシステムのプログラムは無償で提供するよと友人達には声をかけたのですが誰も乗ってはきません。登別の片田舎で細々と動いていていつかは命脈がつきてしまうのかと半ば諦めてもいたのですがこの物語にはまだ続きがありました。

二十一世紀にはいり日本はなかなか不況から脱出できないでいますが2001年夏、東京の明電舎が突然私の診療所にやって来ました。東証一部上場の歴史ある重電メーカーである明電舎が医療福祉分野に進出するにあたり知恵を！貸して欲しいと

いうのです。電子カルテ、医事会計システム、医療画像ファイリングシステムの三つのプログラムが連動して動く医療IT化システムの開発を目指す、開発に協力して欲しいというのです。これには正直驚かされました、すでに電子カルテは数社から実用化されており商売としては難しいのでは、と申し上げたのですが担当のYさん、私と同年代なのですがたいへん情熱家で、私はこの話にのめりこむ事となったのです。こうして私はほとんど毎月東京に通うこととなつてしまいました。最初は一年でと言っておりましたが、私の予想どおりというか最初の打ち合わせ会議から二年を経てもようやく素晴らしいシステムが完成しつつあります。

今、私の診察室の机には二台の大きな液晶ディスプレイが置かれております。電子カルテはもちろん、院内検査、検査センターに外注した全ての検査データ、開業以来の全てのレントゲン写真、心電図や内視鏡画像など、昨年から内視鏡、超音波画像は光磁気ディスクを介して画像ファイリングシステムにファイリングしているのですが、患者さんのあらゆる医療情報を一元的に管理しこのデュアルディスプレイ環境を駆使して参照しながら診療にあたれるという幸せな状況にあります。

これらの医療情報は院内のどこからでも端末で参照が出来ますし現在のところは閉鎖したネットワーク下で使われていますが情報自体は標準化を強く意識した形で管理されているので将来にわたって有効に活用できる可能性を秘めております。

振り返ってみますと十七年前に内科医院を開業した当時から医療情報の電子化という命題は常に私の頭の中にあつたと思うのですが、同じ意志をもったたくさんの人に支えられることにより夢は現実になるものだと思ひが深いです。

室蘭市医師親交会さよならパーティー

三 村 博 通

(三村病院)

室蘭市医師親交会が発足されて五十数年あまりの歴史に幕を閉じる為、名残を惜しむ「さよならパーティー」が、平成十五年七月四日(金) ホテルサンルート室蘭四階陽光の間に、会員と奥様の参加を得て総勢七十名のもとで盛大に催された。

室蘭市医師親交会のそもそものは時の流れの中で、室蘭市医師会員の諸先輩が当時の医事情勢の中で会員相互の生活権を守るべく作り上げた互助会的な資金作りが発端であったことは承知の如し、そのもともとの源流の因とは異にして貯えたお金の利息を活動資金にして、親交を深めていたのであるが、時代の流れで、銀行のペイオフ問題がのしかかり預貯金の保全が困難になったこと、利息の極小で活動資金が保てなくなったことなどが原因で会の維持が困難となってしまった。しかしその存続を会員が否定したのではなく存続の意義は会員が認めながらも、名残を惜しむ思いを残しつつ一応の区切りをつけるべくパーティーが盛大に催されたわけである。

畠山正照行事委員長の総合司会進行により斎藤修弥会長の挨拶、原田一洋元会長の乾杯の音頭があり、宴がたけなわの中で会員の諸先生のテーブルスピーチがありました。国本鎮雄会員からは親交会の旅の思い出、黒光康夫会員からは亡き大久保洋平・上田智夫会員の思い出のお話があり、飯島三男会員からは

昭和二十七年発足の当時のお話があり、安立かほり先生の御活躍の弁もあり、又斎藤義寛会員からは創設者の一員であった亡きお父上のお話があり、親交会雑誌の編集長であった加藤治良会員からは親交会には遊びが必要であり、その遊びの親交会雑誌波久島への想いを語っていただくなど数々のスピーチが展開されました。

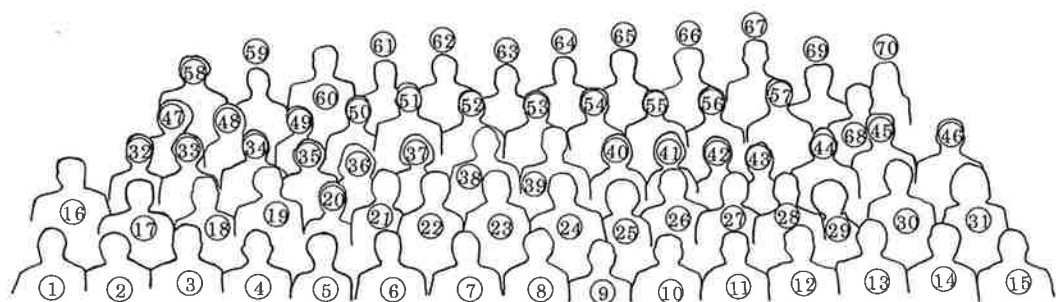
祝宴はワインの香がいつぱいの中で催され、特にそのワインは謂われある九一年ものシャトー・ラフィット・ロートシルト(赤)、九二年ものシャトー・オー・ブリオン、九三年ものシャトー・ムートン・ロートシルト、ドンペリと銘酒がそろい香り高き美酒の中でワインに対する造詣の深い畠山正照会員のコメントをいただきましたながら夜の更けるに連れ盛大に盛り上がっていった。ちなみに日本酒は久保田・八海山・初孫の類でした。約二時間のうたげが過ぎ大岩昌生副会長の「乾杯」の御発声により宴を閉じました。

室蘭市医師親交会が長期に渡り存続したことは良き時代の象徴としての産物であったように思えます。すべてが終わっていく昨今、時の流れは多くの良き物を飲み込んでいってしまう。しかし時代の流れが又新たな親交会を発足させ得る事を願い、会場に集う会員各位のこの暖かき想いがあれば再び新しい親交会の一ページが開かれると信じ、小生は会場を後にした次第です。





室蘭市医師親交会さよならパーティ 平成15年7月4日 ホテルサンルート室蘭



会 員

- | | | | | |
|--------|-------|---------|----------|--------|
| ①高島信治 | ⑪黒光康夫 | ②③神島茂夫 | ④③横山洋子 | ⑤⑦松村茂樹 |
| ②鴨井清成 | ⑫東 浩 | ④④後藤正邦 | ④④畠山正照 | ⑤⑧神島博之 |
| ③飯島三男 | ⑬鈴木久雄 | ⑥⑥塩澤英光 | ④⑤曾田光彦 | ⑤⑨大鹿徳洋 |
| ④国本鎮雄 | ⑭遠藤秀雄 | ⑦⑦大川原修二 | ④⑥足永 武 | ⑥⑩西里弘二 |
| ⑤安立かほり | ⑮菊入 剛 | ⑧⑧下地 晋 | ⑤①西島 毅 | ⑥①千葉泰二 |
| ⑥加藤治良 | ⑯斎藤義寛 | ⑩⑩木下 博 | ⑤②齊藤甲斐之助 | ⑥②鴨井清貴 |
| ⑦原田一洋 | ⑰小田切醇 | ⑪⑪栗林博子 | ⑤③三村博通 | ⑥③安藤修一 |
| ⑧斎藤修弥 | ⑱村井么乙 | ⑫⑫松田幹人 | ⑤④開田博之 | ⑥④神島 章 |
| ⑨大岩昌生 | ⑲澤山 豊 | ⑬⑬皆川芳徳 | ⑤⑤稲川 昭 | ⑥⑤堀尾昌司 |
| ⑩鴨井清一 | ⑳兄玉直彦 | ⑭⑭皆川和廣 | ⑤⑥角 哲雄 | ⑥⑥吉井大介 |

同伴者

- | | |
|---------|---------|
| ②⑩澤山あさ | ④②畠山英子 |
| ②①児玉成子 | ④⑦神島修子 |
| ②⑤後藤征子 | ④⑧安藤紘子 |
| ②⑨下地美智子 | ④⑨西里悦子 |
| ③①木下美紀子 | ⑤⑩西島栄子 |
| ③③高島洋子 | |
| ③⑤国本正子 | |
| ③⑥鴨井教子 | 事務局 |
| ③⑦皆川君代 | ⑥⑧高橋則夫 |
| ④⑦皆川伊都子 | ⑥⑨小杉修一 |
| ④①斎藤淑子 | ⑦⑩広瀬あゆみ |

斉藤光史先生との思い出

西里 弘 二

(西里内科循環器科医院)

時の過ぎるのは早いもので斉藤先生が亡くなられて二年が過ぎようとしています。

先生が入院し亡くなるまでの一週間ほど時の流れの残酷さ、どうにも出来ない無力さを感じずには居られませんでした。ことの始まりは友人よりの電話からでした。斉藤が入院したらしいが何か知っているかと言われ、そんな話は聞いていないと話すと、家に行つて確認しあとでまた連絡すると電話は切れました。その後入院の確認の連絡があり病状を聞きに行つて教えて欲しいといわれ、夕方、主治医に会い病状を聞いたところ、スキルス型の胃癌でかなり進行しているとの話でした。まだ入院したばかりでデータも揃っていないだったので二、三日後にはもっと詳しいことが分かるだろうとその日は帰宅しました。しかしその後得られる情報は深刻なもので猶予がないと考え友人と見舞いに行きました。部屋に入ったところ、あの恰幅の良い姿はなくあまりの変わりように一瞬見間違ふところでした。見舞い時には運良く目を開けており、名前を呼んだところ顔を向けて声を発し、両手を挙げて何かを訴える感じがしたがはっきり聞き取れなく、つい大きな声を出してしまい看護婦に注意されそれ以上は何も聞くことができませんでした。意識は混濁しているもののこの次は話が出来るかとも思ひながら帰宅しま

した。しかし次の日の夜、電話で急変したとの知らせがあり、駆けつけたときには既に遅く亡くなったあとでした。安らかな顔をしていたのが救いでした。

先生との出会いは高校二年にクラス替えで同じクラスになったときですが、高校時代の先生は新太郎刈でやせていた印象があるだけでそれ以上のことは全く憶えていません。先生とは別の中学校の出身であり、私が野球をやったりしていたので、付き合うグループが別々だったためと思います。高校卒業後一度も交流することなく二十年が経過していました。昭和五十八年に私が開業することになり、開院披露パーティーの人選をしているときに初めて先生が室蘭で開業していることを知りました。案内状を送ったところ、早速出席の返事をいただき会場でお会いしたとき、高校時代より恰幅がよくなり髪型も変わっていましたがお互い昔の面影を残していたのかどちらからともなく「オウー暫く」との挨拶の瞬間二十年の時が消え高校時代に戻り同級生として新たな親交が始まりました。それから年に三、四回同級生男女合わせて五、六人で会食会をすることになりました。しかしこの会は女性陣の音頭とりで集合することがほとんどでした。いつも先生が話の中心に居り、話が途切れることもなくわいわいがやがやと賑やかに楽しい一時を過ごしました。この会を開くなかで高校の同期会の結成の話が出て、初代会長に先生が就きました。初めての同期会には百人以上の出席があり、その後も四年毎に開催されています。今年は還暦を迎えるので特別に同期会を開くことになっていましたが、先生の姿を見ることができないのはさびしい限りです。また同窓会の八十周年記念にはリーダーシップを発揮し期として一番多

くの寄付金を集めることとなりました。この会食会も先生が亡くなられてからは回数も少なくなり、先生の賑やかな明るい声を聞けなくなり淋しいですが、最低、命日だけでも集まりたいと思っています。

また先生との交流の中ではカーリングを通して付き合った時間が一番長く、楽しい経験を見せていただきました。先生は高校、大学時代スピードスケートの選手だったとのことですが、その片鱗を一度も見ることがありませんでした。しかしどのような経緯かわかりませんが、突然カーリングをしてみないかと言われ、有無を言わず、中島のスケートリンクに連れられ経験者からストーンの投げ方、ブラシを使つてのスイーピングの仕方などの指導を受けて実際にやってみるとこれがなかなか上手いかず、一―二メーターでバランスを崩しすってんころりと無様な姿を呈するだけでしたが、先生は転ぶこともなく氷上を滑ってリリースすることができました。一日の長を感じるとともにスケート経験の片鱗を見せてもらいました。二ヶ月が経った頃、札幌でテレビ局主催の全道大会が土、日と開催されることを知り、先生の鶴の一声で全くの素人が無謀にも出場することになりました。幸い午後からの試合で仕事を休むこともありませんでした。チーム全員が勝敗のことなどより真駒内の立派なリンクで他流試合をできることで気持が高揚していました。勝負はやって見なければわからないの如く、信じられないことに一回戦に勝ってしまいました。日帰りのつもりが急遽札幌に宿泊し、気分は最高潮で祝勝会をし、氣勢を上げ翌日の二回戦に臨んだもののそんなに甘くなく簡単に負けてしまいました。しかしこれを契機にチームも纏まり、カーリングの面白さ

に惹かれ、冬の四ヶ月間は週に一回の練習や試合に精を出すようになりました。カーリングは最低でも三人（通常は四人）が揃わなければ試合が成立しないので、先生も忙しい中必ず出席し、時には会合の途中か後なのか酒気を帯びながらプレーすることもありました。先生のプレーは結果オーライというと語弊がありますがミスがミスでなくナイスショットになることが結構あり、真似することのできない特技でした。先生の緊張したところを見たことがほとんどありませんでしたが、一度だけある大会でドロッシュットのプレーオフになり先生の一投が勝負を決することになりました。先生のプレーに備えつつふと顔を見るとひどく緊張しているのが感じられ、思ってもいなかったことでした。見事にドロッシュショットが決まり勝った時の緊張から解放され、喜々とし満足した顔は忘れられません。室蘭リーグでは最高齢、強豪チームとして何回も優勝しましたが、仕事の都合でその後他地域での他流試合をすることができなかったのが残念です。

先生は室蘭カーリング協会の会長として会の設立、発展に尽力し、会員の仲には指導員、審判員の資格を取り、長野オリンピックの審判員として参加するまでになりました。しかし残念なことに先生は亡くなる一年半前に下肢を骨折してからはプレーをすることがなくなり、またリンクに来ることもなくなり、我がチームは三人で試合を戦うことになりました。何とか優勝して一緒に飲みたいとの思いで戦いましたが、下位に低迷し、美酒を贈ることができませんでした。先生が亡くなってから、新メンバー二人を入れてリーグ戦に臨みましたが、連戦連敗でチーム結成以来初めてリーグ戦最下位を経験しました。先生が

居たときのような絶妙なチームワークを作れず、また気力、体力的にも限界で残念ながら解散しました。

先生が骨折して、その後歩行時に痛みがあるのか杖を使うようになり、また白い口髭、顎鬚をたくわえるようになってから以前の活動的で精力に溢れていた様相が影を潜め、落ち着いた紳士然とした振る舞いが多くなり、同期会でも一様にビックリしていました。亡くなる年の二月にいつものメンバーでぶぐ料理を食べた時、いつもは私と競って食べる先生が余り食べなく静かに飲んで話すのを見ていて何となく違和感を覚えながら別れたのが最後になってしまいました。

本当に楽しい沢山の思い出をありがとうございます。先生の笑い声、歌声、話し声が聞こえてくるようです。いずれ彼の地へ行く身、その時は「オー！良く来たなあー」と迎えてください。

佐藤東一先生のこと

飯 島 三 男

佐藤東一先生には私が昭和二十七年に室蘭通信診療所に勤務して以来、五十年にわたり大変お世話になりました。

先生は私の大先輩で、戦時中は軍医として出征されご苦労されました。特にビルマ戦線では筆舌に尽くせない悲惨な体験をして、英国軍の捕虜となりこれ又つらい思いをさせた由、話しておられました。

復員後は日鋼病院外科にて松岡院長・池田副院長と地域の患者さんの為に尽くされて、手術後などは高島先生と共に遅くまで頑張って勤務をしておられました。

日鋼病院退職後は、はらだ外科・N T T・赤十字・太平洋病院その他を頼まれてお手伝いしていましたが、学術講演会等の勉強会には進んで来られて勉強しておられました。

若いころはスポーツも大分された様ですが、お酒は好きの方で私など良く御一緒させて頂きました東 栄先生とはお話が合う様でした。

昔は呑み過ぎて転んで背中を傷めたとか。

ビールもお強かったのですが、何時かそれも召し上がる事も叶わなくて未だこれからという人生を終わられたのは誠に残念な事でした。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

本来ならば、大岩先生が書かれるはずでしたが、入院されてしまったので私が書かせて戴きました。

偲 上田智夫先生

児 玉 直 彦

(児玉泌尿器科医院)

度々一緒に旅行をしているので、上田先生への追悼文をと編集子から依頼されたが、先生が波久島その他に軽妙洒脱な文を

又室蘭地方史誌などには、重厚な文体で発表されており、私等到底足元にも及ばず書くことに躊躇させられた。しかし折に触れ先生に接した事も多くあり、又孝子夫人から先生が病床で認めた一文が見つかったので、何らかの形で投稿出来ないだろうかと「文」を寄せられた。

病床にある先生の姿を少し垣間見る事が出来るのではないかとお引き受けた次第である。先生との最初の出合いは、昭和四十八年四月私が室蘭市医師会理事になってからであった。当時室蘭市では公害問題がクローズアップされており、公害、環境対策担当を割り当てられた。先生から手を取り足を取ってご指導戴いた。その後も医師会活動を中心に大変お世話になった。

先生の奥様と家内は趣味を通じて良き友人であった。それぞれが年末年始、GWに海外旅行しているが今度から一緒に行きましようとの談合、エジプト行はイスラム原理主義者のテロ行為が目に乗ると一度ならず回避、しかし奥方は二人でも出かけるの宣告、迷える羊も同行する事となった「一九九四、一二」

爾来七度先生御夫妻と海外旅行を楽しみ、一層親しくさせて戴いた。私は出発前にガイドブックを一瞥するのみだが、先生は完全に自分のものにして、現地で見ざるべき場所、博物館、美術館などを訪ね歩くのが常でした。さらにその国、その地の「酒」「ワイン」のコレクターとして遺憾なく才を発揮され、必ずその国の銘酒を手に入れ、重く膨らんだバックを担いで帰国していました。

下戸の私もお酒の味がある程度分かるようになり、旅のもう一つの楽しみともなった。

年末年始、GWの時期を外すと、数回も多く旅行が出来るの

に、因果な商売だなーとコボシつつも目も口も笑っています。先生は五月生まれ、旅程中添乗員から「本日は上田様の誕生日に当たります。おめでとうございます」と楽しい特別企画が打ち明けられ、夕「昼」食会が一段と盛り上がりまします。

先生のお礼のスピーチが始まる。この地に適した故事来歴を話され、ここを訪れた大きな理由は、それを見聞きしたかったのと前置きして縷々述べられ、この旅で合いおた仲間に盛大なパーティーを開いて戴き有り難うございましたと結ぶのが常でした。この数年間自宅でお祝いをしたことがないんだよナと悪戯っ子のような目をして嬉しそうでした。

スペイン・アルハンブラ宮殿観光時、日本語の上手な現地ガイドがいろいろ説明している最中、急に先生の帽子を取り上げてしまった。一同哑然とする中彼も自分のハットを取った瞬間・・・大爆笑、お二人の「おつむ」は同じように見事な禿頭でした。先生すかさず「俺たちは双子の兄弟さ」と肩を組み大笑いそれから一層ツアー仲間の親近感が深まり楽しい旅になった事は言うまでもありません。

あるときこれから当分アルコールは飲まないよと宣言。あれ程お好きであったワインを全く口にしません。思えばその頃より肝機能に異常があり、自覚症状があつたのではと推測されました。数ヶ月するとホンノ僅かワインを口にされる事がありますが自分が自分を律する厳しさは驚く程でした。

帰宅後お互いの写真やビデオの発表会を両家で交互に行い、旅の楽しみを幾重にも味わうのが常でした。

最近腹水が溜まって苦しいんだ、薬で少しは楽になるが、又俺の命脈もまもなく尽きるだろうとポツリと漏らされた。私

は押し黙るほかなかった。

平成一五年二月一日午後より上田宅に友人三家族集まり旅行の発表会を開きました。

私は「サウジアラビア」「ヨルダン」の見聞を話したところ、先生もかつて訪れた時の事を鮮明に話され記憶力の素晴らしさに驚かされました。今回は残念ながら旅行が出来なかったがと分厚いアルバムを持ち出して広げ多くの思い出を話されました。食卓上に先生が特別注文で誂えたカナッペなどを飾り付け、秘蔵のワインを開け、僕はまだ飲めないがと私たちに勧められたのが印象的であった。十一時頃先生は先に休むから、ゆつくりしていつてと二階へ上げられた。

後日先生が最後の晩餐とも言うべき食事会であったと大変喜ばれていたと奥様からお聞きし胸が締め付けられる思いであった。

二月十四日迄閉院するからと他医療機関宛てに患者の紹介状を書き続け、最後の最後までなすべき事を成し遂げたと思われる。

二月十六日入院、十七日早朝先生は愛する奥様、御家族を残し永久の旅へ……

先生の遺筆「ケタラールの麻酔」について主治医であった日鋼記念病院の篠原先生に確かめて戴いた所、平成十三年九月十四日肝臓のエーテル治療の際に行なわれていた事が分かった。

その文を御披露して先生への追悼とします

ケタラールの麻酔

導入の記憶は、はつきりしない。角田ドクターの声のみの気

がする。篠原先生の「そこまでは私がやる。アルコールは先生が注入して」との指示があつて、迷濛状態に入る。たぶん意識が戻ってきつつある時に瞼を開けようと、手を触れるのが、わかる様な気がした。

SF映画、何であつたかははつきりしないが、狭い空間を早いスピードで通り抜けていった。三方「四方か」は格子縞の垂直な面だった気がする。「スターウォーズ帝国の逆襲」「二〇〇〇何年、宇宙の旅、或いは色々なロボットや動物が出てくるSF物?」。手がサイドにある物体に触れるが、厚手のゴム手袋のままの接触感で、だんだん薄手の手術手袋となってくる感覚がある。

処置室の天井にある模様がゆがんで薄ぼけて見える。

両側に三人の女性らしい人が見えてくる。この時点では、色があつた気がする。不思議なことに、ギャング映画や、SFで見える半透明のプラスチック「或いはビニール」の面をかぶつていて、時間の経過と共に下方から、正常の形に近づいて行く、声で何と言ったかはハッキリしないのだが、間のびした、たとえば「ウェーダー・サン、ワカーリマスカ」といった間のびのした感じである。自分では「私は「又は僕は」生きているんだろうか」と聞き返した気がする。「あとで事実であつた旨の証言を聞いた。」頭の状態は悪酔い十船酔いの気分だが、頭痛や強烈な症状はない。

最後に挿入の酸素、他を抜いた時に、軽い嘔吐感と、ツバを出したくらいである。

色々な感覚が徐々に戻ってきて、知っている三人の女性がハッキリして、婦長、もう一人去つて、一人だけが残ったのがわ

かる。

あつ自分は生きてこの世界に戻ったのだというのが実感であった。

色々な人から麻酔中の感覚を聞かれる。

角田先生から「夢を見るので、嫌う人もありますよ」と言われた。

色々有り難うございました

ご冥福をお祈り申し上げます

合掌

国本孝夫君の思い出

小玉俊典

(こだま消化器内科クリニック)

国本孝夫君は昭和59年より伊達市で皮膚科を開業し、その後、平成3年より登別市新生町に移転してきました。国本孝夫君とは函館ラサル高校での同窓でありました。長い間、国本君とは音信が途絶えておりましたが、小生が室蘭で開業してから室蘭ラサル会や若手医師の会などで親交を深めて参りました。

国本君は多芸多趣味で文才もあり、人を引き込む魅力を持った好成年でした。特に、国本君のスキューバダイビングが趣味で時間を作っては診療所を休診にして、パラオやグアムやハワイや慶良間の海にスキューバダイビングに行かれていたよ

うです。マンタが悠々と泳いでいる慶良間諸島でのビデオを頂き、小生もスキューバダイビングを始めました。

さらに文才にも優れており、その一端は波久島21号の「医療機関にて事件発生」などの文を読んでいただけるとご理解いただけるかと存じます。同号に国本君が寄稿した、「進行性食道癌」を読んだとき国本君が重大な疾患に罹患していることを知りました。放射線療法と化学療法を行い、その後、母校の岩手医科大学で手術療法を受けたと聞き大変に危惧しましたが、翌年の函館ラサル会に出席したとき、また、スキューバダイビングを行っていると嬉しそうに話されて、手術は奏効したものと思っておりました。開胸手術を行いスキューバダイビングが行えるまでに回復したのかと驚愕しましたが、国本君の話では陸で呼吸するより海でアクアラングを使用している方が呼吸するのに楽であると聞き納得しました。

その後、波久島22号の寄稿文に詳しく国本君が書いております。残念なことに再発があり、再度、化学療法を受けているとのことでした。

その後の国本君は伊達で開業されていた弟の国本三夫先生を登別新生町の皮膚科クリニックの院長に就任させ、若手医師会を開催し室蘭登別で開業している先生に紹介し引き継ぎを行いました。国本君は予後を十分に謳歌しようとパラオ、ハワイ、グアムなどでのスキューバダイビングの予定をたてていたようです。小生も国本君と慶良間に繰り出して国本君の案内でマシタ見ながら国本君をスキューバダイビングしたいと考えておりました。

平成15年3月27日に突然の訃報が飛び込んで参りました。享

年53歳。国本君は神になって高天原に旅立ってゆきました。黄泉の世界にも広く真つ青な海が広がっていたら、今度こそ、国本君とマンタ見物に行くこと楽しみにしております。

洋平先生へ

加藤 治 良

(加藤内科医院)

貴方の旅立ちへの実感が全く湧かぬままに、あの頃あの時の何気ない情景や言葉が思い出されてきます。

二十年以上も前の春の波止場。ファインダーから目を放すと

「先生、何を撮っているんですか」

振り向くと黒のジャンパーを羽織った貴方でした。

「風ですよ」

「風？ あ、なるほど」

さすが俳人東陽老先生の御曹司と、感心しましたよ。

『波久鳥』の打ち合わせで、初めて私の書斎に見えられたとき、
「コックピットが好きなんですネ」

8ミリフィルムの編集中で、窓際に並べたメカが普段より多かったんです。私自身はジェット機よりプロペラ機の方が好み。編集会議を終えて、何人かがフライドポテトの盛り皿を囲んでの世相風俗批判のあれこれ。季節感の衰え、土地体臭の消滅を嘆いた私に貴方は

『そう言えば、札幌の地下鉄の出口に立った時、街並みや通りの感じがどの駅でも同じに見えて戸惑うことがあるんです』
変化・無変化を見据える皮膚科さんの言葉らしく面白いと思いましたよ。

「戸外に出られないのが、つらいです」電話の声がやや重いかなど感じられたのですが、ふと思いついてセールス君に届けてもらったのが『もるえらん風画帳』なんです。フィルムからのビデオ仕立て、素人の遊び作品に過ぎませんが、小一時間は港と岬の風に吹かれ、無聊の慰めに役立つのではと思いました。

貴方の程良き几帳面さが『波久鳥』の中心的役割を見事に果たしてくれました。高橋さんとの細かい打ち合わせで流れをきちんと作られましたね。あの本は貴方方御二人の作品です。

その『波久鳥』が飛び立つことになった今年早々に上田先生、そして貴方もまた旅立たれました。“因縁とはかくの如きもの”、でしょうか。何の関連もなくお父上の句が浮かんできました。

カルルスの真夜の湯壺を泳ぐ蛇

では・・・・・・・・

親交会行事略年表

昭和二七年	五月一日	親交会結成。会長 斉藤義太郎
昭和三〇年	九月二八日	登別第一滝本館にて総会・懇親会
昭和三一年	五月二九日	定山溪ホテルにて総会・懇親会
昭和三二年	八月二一日	洞爺観光ホテルにて総会・懇親会
昭和三三年	七月二〇日	北海道博覧会見学
昭和三四年	五月三一日	カルルス温泉にて懇親会
昭和三四年一〇月二四日		湯の川にて観楓会
昭和三五年	九月一七日	クッタラ湖にて野外パーティー
昭和三六年一二月二〇日		常盤にて一〇周年記念撮影
昭和三七年	八月一八日	支笏湖グランドホテルにて総会・懇親会
昭和三八年	七月二〇日	層雲峡ホテル大雪にて総会・懇親会
昭和三九年	七月一一日	定期総会にて規約一部改正
昭和四〇年	三月三一日	斉藤前会長顧問となり新会長宮本栄二
昭和四一年	七月一六日	朝里観光ホテルにて総会・懇親会
昭和四二年	五月一三日	登別グランドホテルにて一五周年記念総会、斉藤(義)、長田、東、佐藤(雄)各氏に記念品
昭和四三年	五月五日	斉藤義太郎元会長死去
昭和四三年	八月一〇日	湯の川にて総会・懇親会
昭和四四年	三月三一日	宮本栄二元会長顧問となり、新会長中島勝美
昭和四四年	八月二日	洞爺湖にて昭和新高山火まつり見学
昭和四五年	一月一八日	中島会長急死、後継会長佐藤善弘
昭和四五年	七月一八日	札幌グランドホテルにて総会・懇親会
昭和四六年	五月二〇日	常盤にて定期総会・懇親会
昭和四六年一二月一〇日		ニュージャパンにて忘年会
昭和四七年	五月二九日	常盤にて総会・懇親会・二〇周年記念品配布
昭和四七年一二月二二日		ニュージャパンにて忘年会
昭和四八年	五月二六日	常盤にて総会・懇親会
昭和四八年	七月二七日	室蘭外港めぐり
昭和四八年一二月一九日		ニュージャパンにて忘年会
昭和四九年	五月二四日	常盤にて総会・懇親会
昭和四九年	七月一三日	洞爺レークホテル親睦旅行
昭和四九年一二月二二日		ニュージャパンにて忘年会
昭和五〇年	六月二一日	登別グランドホテルにて総会・懇親会・規約改正
昭和五〇年一二月二二日		ニュージャパンにて忘年会
昭和五一年	五月一八日	八芳園にて総会・懇親会
昭和五一年	九月一八日	栗林家庭園(蕙山苑)にて野外パーティー
昭和五一年一二月二二日		ニュージャパンにて忘年会
昭和五二年	三月三一日	原田一洋新会長
昭和五二年	五月二七日	医師会館にて総会・懇親会
昭和五二年	七月二三日	十勝川温泉、池田ワイン城、親睦旅行
昭和五二年一二月二二日		医師会館にて二五周年記念式典 常盤にて祝賀会、長田、東、佐藤(善)、米沢、曾根、峰本、高橋(繁)各氏に記念品
昭和五二年一二月九日		ニュージャパンにて忘年会

昭和五三年	五月二五日	ニュージャパンにて総会・懇親会
昭和五三年	七月二二日	小樽（天望閣）余市（あゆみ荘）親睦旅行
昭和五三年	二月二三日	ニュージャパンにて忘年会
昭和五四年	五月二二日	ニュージャパンにて総会・懇親会
昭和五四年	六月九日	湯の川若松、及び大沼大洋ホテル親睦旅行
昭和五四年	二月二二日	ニュージャパンにて忘年会・記念撮影
昭和五五年	五月二二日	ニュージャパンにて総会・懇親会
昭和五五年	六月七日	札幌センチュリーローヤルホテル、アサヒビール園親睦旅行
昭和五五年	一〇月一〇日	親交会誌「波久鳥」創刊号発行
昭和五五年	二月二二日	ニュージャパンにて忘年会
昭和五六年	五月二二日	ニュージャパンにて総会・懇親会
昭和五六年	六月二三日	旭川（優佳良織工芸館・買物公園）親睦旅行
昭和五六年	二月二一日	ニュージャパンにて忘年会
昭和五七年	五月二八日	ニュージャパンにて総会・懇親会
昭和五七年	一月二〇日	親交会創立三〇周年記念旅行（台北）
昭和五七年	二月一〇日	ニュージャパンにて忘年会
昭和五八年	五月二六日	ニュージャパンにて総会・懇親会
昭和五八年	七月一六日	洞爺湖周辺（昭和新山・中島・三樹園）親睦旅行
昭和五八年	九月二九日	秋の行楽会（本輪西サン・ロード）
昭和五八年	二月一三日	ニュージャパンにて忘年会
昭和五九年	五月二三日	ニュージャパンにて総会・懇親会

昭和五九年	六月二三日	札幌（サッポロビール園）小樽（博覧会）親睦旅行
昭和五九年	九月二二日	秋の行楽会（亀田記念公園）
昭和五九年	二月一四日	ニュージャパンにて忘年会
昭和六〇年	四月一日	上田智夫新会長
昭和六〇年	五月二九日	ニュージャパンにて総会・懇親会
昭和六〇年	六月一五日	函館湯の川方面親睦旅行
昭和六〇年	九月二一日	秋の行楽会（ホテル・セピアス）
昭和六〇年	二月一三日	室蘭プリンスホテルにて忘年会
昭和六一年	五月二九日	室蘭プリンスホテルにて総会・懇親会
昭和六一年	六月二八日	札幌（野幌開拓村・百合ヶ原花と緑の博覧会）親睦旅行
昭和六一年	九月二一日	秋の行楽会（崎守町・レストラン志摩）
昭和六一年	二月二二日	室蘭プリンスホテルにて忘年会
昭和六二年	五月二七日	室蘭プリンスホテルにて総会・懇親会・記念撮影
昭和六二年	六月二四日	ビールパーティー（ホテル・サンルート）
昭和六二年	一月二〇日	親交会創立三五周年記念旅行（香港・マカオ）
昭和六二年	二月二一日	室蘭プリンスホテルにて忘年会
昭和六三年	五月二六日	ホテルサンルート室蘭にて総会・懇親会
昭和六三年	七月一六日	ニセコ（泊）余市方面親睦旅行
昭和六三年	九月二八日	秋の行楽会（高原ロッジだんぱら）
昭和六三年	二月九日	室蘭プリンスホテルにて忘年会
平成元年	五月二五日	室蘭プリンスホテルにて総会・懇親会
平成元年	七月八日	旭川・旭岳温泉親睦旅行

平成 元年 九月二三日	秋の行楽会（亀田記念公園）
平成 元年 二月二五日	室蘭プリンスホテルにて忘年会
平成 二年 五月二五日	ホテルサンルート室蘭にて総会・懇親会
平成 二年 七月七日	函館・湯の川・吉岡海底駅親睦旅行
平成 二年 一〇月一日	秋の行楽会（蘭亭）
平成 二年 二月二四日	室蘭プリンスホテルにて忘年会
平成 三年 四月一日	斎藤修弥新会長
平成 三年 五月二九日	ホテルサンルート室蘭にて総会・懇親会
平成 三年 七月六日	札幌・石狩方面親睦旅行
平成 三年 九月五日	秋の行楽会（ビアカビンエレガ）
平成 三年 十二月二日	ホテルサンルート室蘭にて忘年会
平成 四年 五月二八日	室蘭プリンスホテルにて総会・懇親会
平成 四年 九月二日	秋の行楽会（新羅館）
平成 四年 十一月二九日	台湾（高雄方面）親睦旅行
平成 四年 十二月一日	ホテルサンルート室蘭にて忘年会
平成 五年 五月二〇日	ニュージャパンにて総会・懇親会
平成 五年 七月二七日	マリンパークニクス・天華園懇親会
平成 五年 九月三〇日	秋の行楽会（ビアカビンエレガ）
平成 五年 十二月九日	ホテルサンルート室蘭にて忘年会
平成 六年 五月一九日	ホテルサンルート室蘭にて総会・懇親会
平成 六年 七月九日	富良野方面親睦旅行
平成 六年 一〇月一九日	秋の行楽会（ビアカビンエレガ）
平成 六年 十二月九日	ホテルサンルート室蘭にて忘年会
平成 七年 五月二六日	ホテルサンルート室蘭にて総会・懇親会
平成 七年 七月二三日	秋の行楽会（レストラン・カーヤ）
平成 七年 十一月二三日	サイパン親睦旅行
平成 七年 十二月八日	室蘭プリンスホテルにて忘年会
平成 八年 五月二三日	ホテルサンルート室蘭にて総会・懇親会
平成 八年 七月六日	カルルス温泉鈴木旅館親睦旅行
平成 八年 九月二二日	秋の行楽会（レストラン・キグナス）
平成 八年 十二月二三日	室蘭プリンスホテルにて忘年会
平成 九年 五月二二日	ホテルサンルート室蘭にて総会・懇親会
平成 九年 七月二四日	行楽会（レストランテ・カリーナ）
平成 九年 十一月二二日	沖縄親睦旅行
平成 九年 十二月二二日	室蘭プリンスホテルにて忘年会
平成 一〇年 五月二一日	ホテルサンルート室蘭にて総会・懇親会
平成 一〇年 七月二五日	留寿都方面親睦旅行
平成 一〇年 九月三日	行楽会（ビアカビンエレガ）
平成 一〇年 十二月一日	室蘭プリンスホテルにて忘年会
平成 一一年 五月二〇日	ホテルサンルート室蘭にて総会・懇親会
平成 一一年 七月二四日	小樽朝里クラッセホテル親睦旅行
平成 一一年 九月二日	行楽会（ビアレ스토랑ンプロビデンス）
平成 一一年 十二月一〇日	室蘭プリンスホテルにて忘年会
平成 一二年 五月一八日	ホテルサンルート室蘭にて総会・懇親会
平成 一二年 七月八日	登別温泉第一滝本館親睦旅行
平成 一二年 九月七日	行楽会（ビアレ스토랑ンプロビデンス）
平成 一二年 十二月八日	室蘭プリンスホテルにて忘年会
平成 一三年 五月三一日	ホテルサンルート室蘭にて総会・懇親会
平成 一三年 七月一九日	行楽会（ビアカビンエレガ）
平成 一三年 十二月一四日	室蘭プリンスホテルにて忘年会
平成 一四年 五月二三日	室蘭プリンスホテルにて総会
平成 一四年 十二月一三日	室蘭プリンスホテルにて忘年会
平成 一五年 七月四日	ホテルサンルート室蘭にてさよならパーティー

親交会在籍者一覽

平成15年3月31日現在

退会者は退会年順
注・同一入会年の内
退会年同一の場合はアイウエオ順

入会年月		氏名		退会年月	
昭和27	5	内田 高德	30	昭和29	8
〃	〃	神田 正一	33	〃	〃
〃	〃	石井 康子	34	〃	〃
〃	〃	今井 真七郎	37	〃	〃
〃	〃	森塚 威光	37	〃	〃
〃	〃	仙仁 勝政	42	〃	〃
〃	〃	大久保 慶之助	42	〃	〃
〃	〃	水野谷 貞寛	43	〃	〃
〃	〃	今井 寅雄	43	〃	〃
〃	〃	斉藤 義太郎	45	〃	〃
〃	〃	中島 勝美	45	〃	〃
〃	〃	中村 孝	46	〃	〃
〃	〃	上田 憲次	47	〃	〃
〃	〃	米川 元重	47	〃	〃
〃	〃	宮本 栄二	47	〃	〃

入会年月		氏名		退会年月	
昭和27	5	佐藤 知信	48	昭和48	1
〃	〃	佐藤 雄三	49	〃	〃
〃	〃	神島 辰雄	50	〃	〃
〃	〃	古河 千代美	50	〃	〃
〃	〃	國本 亮平	54	〃	〃
〃	〃	長田 廣	57	〃	〃
〃	〃	大西 清	59	〃	〃
〃	〃	川口 柳之助	60	〃	〃
〃	〃	北原 武雄	60	〃	〃
〃	〃	湊 隆	60	〃	〃
〃	〃	東 栄	61	〃	〃
〃	〃	桜庭 シゲ	61	〃	〃
〃	〃	栢植 重夫	8	〃	〃
〃	〃	中村 秀	9	〃	〃
〃	〃	米沢 堡	14	〃	〃
〃	〃	安立 かほり	15	〃	〃
〃	〃	石突 信	15	〃	〃
〃	〃	高橋 陽夫	15	〃	〃
昭和29	1	阿部 新一	36	昭和36	3
〃	〃	三上 敏雄	41	〃	〃
〃	〃	稲葉 真	54	〃	〃
〃	〃	青山 政太郎	56	〃	〃
〃	〃	伊藤 貢	61	〃	〃
〃	〃	皆川 英弘	61	〃	〃
〃	〃	佐藤 善弘	61	〃	〃

〃	〃	〃	昭和 35 ・ 5	〃	〃	〃	〃	昭和 34 ・ 5	〃	〃	〃	〃	〃	昭和 32 ・ 5	〃	〃	〃	昭和 31 ・ 5	〃	〃	〃	〃	昭和 30 ・ 5	入会年月
---	---	---	--------------------	---	---	---	---	--------------------	---	---	---	---	---	--------------------	---	---	---	--------------------	---	---	---	---	--------------------	------

池田満穂	峰本一	高橋繁介	柴田正雄	黒光康夫	高橋ハル	細谷俣	熊谷太市	山中幸造	千葉壽良	深瀬政俊	徳田敬太郎	鈴木好晃	三好清蔵	高橋米三郎	上岡幸七	松井辰生	大辻祐太郎	曾根清孝	國本鎮雄	大岩昌生	遠藤孝二	池田洋二	狩野正直	氏名
------	-----	------	------	------	------	-----	------	------	------	------	-------	------	------	-------	------	------	-------	------	------	------	------	------	------	----

平成 4 ・ 2	56 ・ 3	54 ・ 5	昭和 36 ・ 5	15 ・ 3	平成 6 ・ 10	56 ・ 9	39 ・ 4	昭和 34 ・ 12	15 ・ 3	12 ・ 9	平成 9 ・ 9	55 ・ 3	51 ・ 3	37 ・ 9	50 ・ 5	45 ・ 9	昭和 33 ・ 11	11 ・ 12	15 ・ 3	15 ・ 3	15 ・ 3	13 ・ 2	9 ・ 11	平成 8 ・ 3	退会年月
-------------------	--------------	--------------	--------------------	--------------	--------------------	--------------	--------------	---------------------	--------------	--------------	-------------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	---------------------	---------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	-------------------	------

〃	昭和 41 ・ 5	昭和 40 ・ 5	〃	〃	昭和 39 ・ 5	昭和 38 ・ 8	昭和 37 ・ 12	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	昭和 37 ・ 5	〃	〃	〃	昭和 36 ・ 5	昭和 35 ・ 5	〃	〃	昭和 35 ・ 5	入会年月
---	--------------------	--------------------	---	---	--------------------	--------------------	---------------------	---	---	---	---	---	---	---	---	--------------------	---	---	---	--------------------	--------------------	---	---	--------------------	------

松川徹一	成松英明	益田祐治	藤田吉徹	開田健三郎	山本卓四郎	一方井章	平間浩明	築田昭三	高橋清成	鴨井三男	飯島欽也	広瀬克英	太田高明	成松貞雄	三村忠男	川原林忠男	斎藤義寛	加藤治良	吉井正仁	榎谷儀一	福永文二	嶋井清一	上田智夫	阿部昭治	氏名
------	------	------	------	-------	-------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	-------	------	------	------	------	------	------	------	------	----

60 ・ 12	48 ・ 6	昭和 48 ・ 3	15 ・ 3	平成 15 ・ 3	61 ・ 7	48 ・ 6	昭和 45 ・ 5	15 ・ 3	15 ・ 3	15 ・ 3	15 ・ 3	10 ・ 6	4 ・ 8	平成 元 ・ 3	61 ・ 10	昭和 40 ・ 5	15 ・ 3	15 ・ 3	平成 7 ・ 4	昭和 58 ・ 5	6 ・ 10	15 ・ 3	15 ・ 2	平成 10 ・ 10	退会年月
---------------	--------------	--------------------	--------------	--------------------	--------------	--------------	--------------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	-------------	-------------------	---------------	--------------------	--------------	--------------	-------------------	--------------------	--------------	--------------	--------------	---------------------	------

〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	昭和44・5	〃	昭和43・5	〃	〃	〃	昭和42・5	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	昭和41・5	入会年月
---	---	---	---	---	---	---	---	---	--------	---	--------	---	---	---	--------	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	--------	------

大谷地	田中	堀尾	吉田	塩沢	有賀	工藤	菅原	萩原	遠藤	木戸	東	下地	大坪	柳川	原田	鈴木	鈴木	神島	大久保	藤兼	岩倉	本庄	竹内	種田	氏名
公迪	豊典	行彦	勝太郎	直人	文伯	和雄	庸雄	一男	秀雄	就一郎	浩	晋	昌	公	洋	雄	弘	夫	平	和	秀夫	晋一	隆一	豊	

15・3	13・5	12・1	平成4・1	57・12	55・4	50・3	48・5	昭和45・8	15・3	10・7	15・3	平成15・3	57・9	昭和50・6	15・3	15・3	15・3	15・3	15・3	15・3	13・5	7・8	7・5	平成3・12	退会年月
------	------	------	-------	-------	------	------	------	--------	------	------	------	--------	------	--------	------	------	------	------	------	------	------	-----	-----	--------	------

〃	昭和51・5	〃	昭和50・5	〃	〃	〃	〃	〃	昭和49・5	〃	昭和48・5	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	昭和47・5	〃	昭和44・5	入会年月
---	--------	---	--------	---	---	---	---	---	--------	---	--------	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	--------	---	--------	------

内海	平野	杉田	吉原	児玉	大吉	斉藤	小國	遠藤	久保	熊谷	神島	山本	村井	畠山	斎藤	大川	小田切	有路	木谷	飯田	西原	清水	高島	後藤	氏名
寿彦	広志	泰宏	暉	直彦	成清	親樹	久之	雅俊	茂夫	弘章	俊一	俊一	乙	照	弥	二	醇	彦次	秀雄	孝司	久貞	信治	正邦		

58・11	54・8	52・10	昭和63・9	15・3	11・12	平成11・3	61・9	56・1	昭和52・6	15・3	15・3	15・3	15・3	15・3	15・3	15・3	平成15・3	56・9	52・10	51・6	49・3	昭和48・2	15・3	平成15・3	退会年月
-------	------	-------	--------	------	-------	--------	------	------	--------	------	------	------	------	------	------	------	--------	------	-------	------	------	--------	------	--------	------

昭和 57 5	〃	昭和 56 5	昭和 56 4	昭和 56 1	〃	昭和 55 6	〃	〃	昭和 55 5	〃	〃	〃	〃	〃	昭和 54 5	〃	〃	〃	〃	昭和 52 5	〃	〃	〃	昭和 51 5	入会年月
---------------	---	---------------	---------------	---------------	---	---------------	---	---	---------------	---	---	---	---	---	---------------	---	---	---	---	---------------	---	---	---	---------------	------

大原吉輝	西島博毅	栗林博子	車田英敏	野村靖宏	南邦弘	太田郁朗	松田幹人	岡田健一	黒坪弘毅	皆川芳徳	西村昭男	安藤修一	有賀和雄	斉藤光史	三村信輔	森川亮	皆川和廣	久安正道	澤山豊郎	安斎哲博	三村通洋	大鹿徳明	清水道実	木戸実	氏名
------	------	------	------	------	-----	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	-----	------	------	------	------	------	------	------	-----	----

元 3	15 3	平成 15 3	61 4	59 3	59 3	昭和 58 2	15 3	平成 15 3	昭和 57 3	15 3	15 3	15 3	15 3	13 10	13 3	15 3	15 3	15 3	15 3	3 3	15 3	15 3	平成 5 5	昭和 62 9	退会年月
--------	---------	---------------	---------	---------	---------	---------------	---------	---------------	---------------	---------	---------	---------	---------	----------	---------	---------	---------	---------	---------	--------	---------	---------	--------------	---------------	------

平成 3 5	平成 3 2	〃	〃	昭和 63 1	〃	〃	昭和 62 11	昭和 62 8	昭和 61 5	〃	〃	〃	昭和 60 5	〃	〃	〃	〃	昭和 59 5	〃	〃	昭和 58 5	昭和 57 6	昭和 57 5	入会年月
--------------	--------------	---	---	---------------	---	---	----------------	---------------	---------------	---	---	---	---------------	---	---	---	---	---------------	---	---	---------------	---------------	---------------	------

伊藤謙治	稲川昭公	柳川志公	斉藤美知子	斉藤甲斐之助	足永武	古賀健一郎	高田芳朗	高橋長雄	石川秀人	菊入剛	川上敏晃	丸田浩	松原初男	安田隆義	西里弘二	辻寧重	村上俊匡	村上俊吾	小林滋宗	塩澤英光	小田代亨	森田益聿	伊藤紀克	大久保淳子	氏名
------	------	------	-------	--------	-----	-------	------	------	------	-----	------	-----	------	------	------	-----	------	------	------	------	------	------	------	-------	----

3 11	15 3	15 3	15 3	15 3	15 3	15 3	2 4	元 3	元 9	15 3	13 11	10 12	5 3	15 3	15 3	15 3	6 1	平成 3 6	昭和 61 9	15 3	14 10	平成 10 3	昭和 59 4	平成 15 3	退会年月
---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	--------	--------	--------	---------	----------	----------	--------	---------	---------	---------	--------	--------------	---------------	---------	----------	---------------	---------------	---------------	------

平成 6 ・ 12	平成 6 ・ 6	〃	〃	平成 6 ・ 1	平成 5 ・ 8	〃	〃	平成 5 ・ 4	〃	〃	平成 4 ・ 5	平成 3 ・ 9	〃	平成 3 ・ 7	平成 3 ・ 6	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平成 3 ・ 5	入会年月
小玉俊典	近藤吉宏	堀尾昌司	高橋基夫	吉井大介	國本清治	開田博之	野田明	木村昌宏	池田洋輔	新井良	角山哲雄	横山洋子	国本えみ子	国本孝夫	木下博史	上田憲次	上田憲一	佐藤東純	福永清貴	鴨井陸夫	西田正一	嶋侯男	勝合誠朗	河合誠朗	氏名

15 ・ 3	6 ・ 12	15 ・ 3	15 ・ 3	15 ・ 3	15 ・ 3	15 ・ 3	6 ・ 7	5 ・ 8	15 ・ 3	15 ・ 3	15 ・ 3	15 ・ 3	14 ・ 1	14 ・ 1	15 ・ 3	15 ・ 3	15 ・ 3	15 ・ 3	15 ・ 3	15 ・ 3	14 ・ 3	7 ・ 5	6 ・ 3	平成 5 ・ 2	退会年月
--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	-------------	-------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	-------------	-------------	-------------------	------

平成 13 ・ 11	平成 13 ・ 8	平成 13 ・ 7	〃	〃	平成 13 ・ 6	平成 12 ・ 9	〃	平成 12 ・ 5	平成 10 ・ 11	平成 10 ・ 6	〃	平成 10 ・ 5	平成 10 ・ 3	平成 9 ・ 10	平成 9 ・ 8	〃	〃	〃	平成 9 ・ 4	平成 8 ・ 7	平成 7 ・ 1	平成 7 ・ 1	北川正樹	吉田勝太郎	氏名
神島博之	宮町敬吉	井上慶俊	鈴木彩弘	鈴木啓明	藤兼正己	堀川正康	横山貴和	赤保良夫	生田茂	柳川讓彦	曾田光彦	四十九院正道	加賀谷秀夫	佐々木裕一	松村茂樹	松田史明	千葉泰二	大平整爾	大宮彬男	北川正樹	吉田勝太郎	氏名			

15 ・ 3	15 ・ 3	15 ・ 3	15 ・ 3	15 ・ 3	15 ・ 3	15 ・ 3	15 ・ 3	15 ・ 3	15 ・ 3	15 ・ 3	15 ・ 3	15 ・ 3	15 ・ 3	15 ・ 3	15 ・ 3	15 ・ 3	15 ・ 3	14 ・ 3	12 ・ 3	13 ・ 5	平成 11 ・ 3	退会年月
--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------------	------

座 談 会

親交会を振り返って

大岩昌生・加藤治良・斎藤修弥
黒光康夫・飯島三男・東 浩

編集委員（三村・斉藤・生田・鴨井・堀尾・曾田・松村・福永・柳川）
事務局（高橋）

平成15年6月23日
於：ホテルサンルート室蘭



大岩昌生



加藤治良



斎藤修弥



黒光康夫



飯島三男



東 浩

はじめに

三村 波久鳥編集委員を代表して挨拶をします。親交会も金利が下がり、運営が難しくなり、解散することとなり、解散に伴う事業として波久鳥二十三号を発刊することとなりました。座談会を掲載することとなり、タイトルは親交会を振り返ってということでお集まりいただきました。御発声を大岩先生にお願いします。

大岩 乾杯

親交会創立時

三村 親交会の解散の理由は既に皆さんご存知ですが、親交会は五十一年目になります。歴史のある会です。

大岩 保険医総辞退騒動の激しい時期に、基金を設けようと作られ、室医会員であれば、誰でも入れる会でした。

三村 初めの会費は月三千円でした。今の価値にしたらどの位でしょうか？

黒光 十倍位ではないでしょうか。

三村 遊びではなく、生活のかかった会で、悲壮なものだったようです。

飯島 事の始まりは飲み仲間（佐藤雄三、長田 廣、東 榮）だった。八百屋さんとか、魚屋さんとかとは違い、何か事が起きたら明日から仕事が無くなるのだから、医者と言うものは「高級日雇い」みたいなものであるから助け合いの共済を設けようとして始めた。

斎藤（修） 僕は親交会に昭和四十七年に入会です。

東 飯島先生の伺ったように単純な発想から始まった。私が入った時に一億円借りられると聞きました。富士銀行の支店長、多田薬局の社長も参画していたんですよ。

三村 私達が聞いている事とちよっと違っていろいろですね。

飯島 貧乏たらしいから言わなかったが、ほんとの話はそうですが、段々と理想的になっていったのです。

三村 当時のお金はどのくらい集まったのでしょうか？月三千円で二十七人という年間いくらですか？

斎藤（甲） 九十七万二千円です。

三村 加藤先生、親交会に対する思いとか、思い出とか。

加藤 有るようで、ふっと無いみたいで、ただ、出だしが厳しかった、旗振って、保険医総辞退ということから、なんとなく気持ち。そして、何かあった時に銀行から借りるために、資金として積立てて、それらが無くなって、仕事から離れて時間があれば、遊びが無くてはだめだもの。「親交会」という名前は何時から出来たか。

飯島 最初から親交会でした。

三村 精神的な拠り所的なものを感じておりました。

加藤 私もそういう感じだけど、長田廣先生ですね、最初の親交会の会長は。

黒光 斎藤義太郎先生です。

加藤 医師会と親交会の会長は一緒なんだ。長田 廣先生は。

黒光 親交会の副会長でした。あの時には若い人がいない。

加藤 黒光先生は最初から、月三千円の時代から。

黒光 三千円の時代から。開業が昭和三十三年だけれど、開業してから直ぐ入った方が良いぞと言うんで、入ると言ったら止められた。二年位止められた。

加藤 余所の医師会で、親交会という
ようなくだけた会を作っているところ
はあるんですか。

斎藤（修） 無いです。

加藤 気分的に良いんだよね。ほどけ
て。（笑）

旅行

三村 その当時の活動はどういうもの
だったのでしょうか。

飯島 旅行をやったのは、記録による
と昭和三十一年に定山溪ホテル、その
次には洞爺観光ホテル、北海道博覧会、
カルルス温泉、湯の川、クッタラ湖、
支笏湖グランドホテル、層雲峡ホテル
大雪と行っています。

加藤 海外旅行には何回行ったのです
か？

三村 四回行きました。（台湾昭和五十
七年・平成四年、香港昭和六十二年、
サイパン平成七年）

加藤 台湾の時かな、或る先生は、心
配して、無事に帰ってきてほしいとい
う気持ちがとても強い。もし何かあつ
た時には、医院だけの問題ではないと。

あれだけの大量のドクターに何かあつ
たらどうするのかと、真剣に心配して
いました。

黒光 台湾で墜落事故がありましたか
らね。

飯島 国内でも同じ事だね。

黒光 長老ばかりで、若い者が行つて
も面白くなく、だからみんな行かなか
った。それ以後に若い人が入るようにな
って盛大になってきた。あまり言う
と拙いな。（笑）

斎藤（修） 本当の話が良いのです。
東 とんでもない会に入つたと皆が思
う。（笑）

飯島 当時の話ですよ、最初の十年位。
だから、旅行に行つた時の写真に芸者
が載っている。

黒光 それからお金が貯まって、旅行
とか、海外旅行をやるうかとか。大体
六％位の利率だった。一億有れば、六
百万の利息。

三村 良い時代は終わってしまったけ
ど。

飯島 今の時代はかわいそうだという
こと。

黒光 使つても使つても余つた。ある

時には小遣いをくれた。（笑）

良き時代

飯島 要するに、理事は理事で、何周
年だといって、生半可なものでないも
のを貰うわけだ。参加していなければ
損だった。医師親交会が金を集めて、
理事は大威張りであった。使い道無い
から富士銀に貯めて。

加藤 今亡くなられた先輩たちは、座
談会でも胡座かいて開けっぴろげでや
っていたでしょ。世の中が違うから。
今はドライになって。

斎藤（修） 良い時代だったですね。

三村 そういう意味では、親交会会長
は銀行に行つて大威張りすべきだった。
斎藤（修） 僕の時代はもう落ちぶれ
た時代ですから。

飯島 何周年と言つて、鉄瓶、掛け軸
を配つた。

黒光 開業して、誰からか聞いて、親
交会があるから入つた方が良いぞと言
われて、入ろうとしたら、入れてくれ
ない。

三村 その訳は。

黒光 その時、鉄瓶を記念品として配ったわけ。

飯島 利息が貯まって、鉄瓶を配るが、新しく入った者にもやらなければならぬ。

黒光 会費をまだ払っていないのに、入った途端に貰うということは、ちょっと待てと、入るのに二年位かかった。東 入るのに、人格とか、品位とかの条件があったね。

飯島 誰が決めるかというと、理事の親玉が決めるわけ。

黒光 その頃、入って直ぐに行ったら、「常盤」でやってた。若い連中誰も行かない。昔はロートルばかりの会で。

東 今でも、同じで若い者は来ない。

飯島 すいません。今ここに呼ばれたのも年寄りばかりで。(笑)

黒光 昔の話だよ。三十何年前で、斎藤義太郎さんが亡くなって、役員会に出なかったんだけど、欠席裁判で親交会の庶務担当にさせられた。次の日飯島先生から電話来て、「お前庶務担当になったぞ」と、行事というのはその当時はあまり無かった。大岩先生と飯島

先生の二人で俺を庶務担当にした。庶務担当だった高橋繁介先生が亡くなった後釜で、やはり庶務担当だった東栄先生が会のとときに「俺について来い」と言われ、僕を連れて中島界限を廻って、女性を忘年会用に指名して、その流れが今でも引続いているわけです。東先生の父さんは功労者なんだ。それまでは、あまり中島は行っていなかったが、それ以来だ。

三村 かなりアバウトだった。

黒光 庶務担当になって、議事録がメモ程度だったが、記録をとるようにして、大久保洋平先生に交代した。

黒光 昔、忘年会やっても、急病センターの看護婦さん達が踊ったり、あの頃は一番盛んだったね。

三村 そういう意味では良い時代に生まれたんだ。(笑)

飯島 三村先生も壇上で刀振って踊ったでしょ。

斎藤(修) 何でも踊ったでしょ。

黒光 その前は大岩先生が踊った。

大岩 医師会の宴会の時に芸をやる人が誰もいなかった。踊りを習って「常盤」の舞台で、踊りました。

黒光 あの頃は楽しかったよ。お金はいくらでも使えたし、今はあまり残っていない。

三村 ニュージャパンの時代が終わって、室蘭プリンスホテルの時代、その後室蘭プリンスホテル、ホテルサンルート室蘭と交互でした。今の残高はいくらですか？

斎藤(甲) 二百万円か三百万円残れば良いかなというところです。

三村 二百万円か三百万円残れば良いという時代になった。

黒光 六%で年に六百万円だからね。それだけあって、使い切れなかった。

三村 一番最高時には利息残高が三千万円ありました。

中興の租

三村 その頃、大岩先生は何をなさっていたのですか？

飯島 その当時、大岩先生は経理担当だった。

斎藤(修) 最初の頃ね。次から、僕はタッチしている。医師会より、親交会の方が早かった。大岩先生に引っ張

られて。

黒光 大岩先生は中興の租だよ。

飯島 大岩先生が悪い、俺たちを皆引っ張りこんで。

斎藤（修） 大岩先生が事業部長になって、僕と畠山正照先生が部員になり、これが医師会の仕事かと思つてやつていた。中身は違つただけで、やつているうちに医師会の事が解つて来た。
三村 あの時代をちよつと味わつた。若い先生方は大変残念だつたと思います。

加藤 私が口を開けば、亡くなつた方の話ばかりになるけど、お父さん（東栄先生）とスタンドバーで一緒になつて、「加藤君、あんた達は若くて良いね」と言われた。やはり、若い人ではないとああいふのは駄目だね。

黒光 私も東 栄先生に女性担当にされて、三村先生に交代すると言つていただけ。

波久鳥

加藤 今日来たら、肝心な二人（上田智夫、大久保洋平両先生）が、この年

に二人揃つてというのが、何か気になつて。次は俺かなと。（爆笑）

三村 波久鳥の雑誌の歴史から行くと称えなければならぬ方々で。

加藤 まずは順調に行つた方じゃないですか。医師会誌じゃないから、名目が。雰囲気盛られたし、他所にも評判は良かったのではないか。止めても、何年かすると、またやつてみるかという人が現れるかもしれないし。

大岩 長田 廣先生がやめて行かれた時に会誌が無いのが残念だと言われて行かれました。

加藤 それと、思い出したのが、座談会（波久鳥第六号）で米沢 堡先生、山本健三郎先生、斎藤義寛先生、阿部昭治先生、四人の四奇人と称して、米沢先生が「お前たちは面白がつて、奇人扱いにして」と言つたので、「いや奇人というのは個性が無くて頭が悪い人は成れないのだ」とそんな事を言つたら「誉めているのかい」と言われ、「誉めている」と答えました。

三村 分かれ目ですが、今後の発刊をどうするか？

斎藤（甲） 親交会の機関誌ですから。

飯島 親交会が無くなつても、親睦会みたいになれば良い訳でしょ。

鴨井 数年に一度でも原稿を集めて発刊したら、いいのでは？

三村 無くなる事には、何となく寂しいなという感じだと思います。二十三号で廃刊になります。

加藤 私個人にとつて、編集というのは遊び精神から出ています。医師会の機関誌と違つて、遊びの精神から出発しているから、非常になかなか年取らなくありがたいと思っています。中学の同期の者が道東の医師と話していたら、雑誌を誉めていたよと、中身が硬くない、ユニークな本だつたと思います。十年前位から、雑誌に興味がある者だけで創つたらどうかと、ゴルフの好きな人はゴルフをする、旅行の好きな人は旅行をする、文章の好きな人がやるという。チラッと出始めました。今度で二十三号になり、今までに二十二冊出した訳で、印象に残っていると云うと、大辻祐太郎先生が自伝のようなものを、なんと編集すると単行本くらいになるのよ、一生懸命書いてくれたんだけど。

三村 原稿用紙八百枚位でしたね。

加藤 大辻祐太郎先生に波久鳥にではなく、一冊の本にしたらと電話しました。昔、考えて止めてしまったのですが、三病院院長、どうだろうかと考えましたが、やはり軟らかくならないだろうと止めました。最初の頃、斎藤義太郎先生が道内で一番仲の良い医師会だと、忘年会などに親交会の名前が付き始め頃、どんぶり勘定だから良くわからないわという時代でした。

三村 五十周年の記念事業、波久鳥の記念号はいくら係るのですか。

斎藤(甲) 上限は設けておりません。(笑)

三村 大体、波久鳥の発行費というのは五十万円位でした。

加藤 一頁一万円でやっていたから、幸松さんの室蘭印刷で、安かったです。

三村 大体今回も五十万円位ですか？

高橋 皆さんの原稿量によると思います。

加藤 創刊号のときに、薬屋さんの広告協賛を頂いた。でもなんかすつきりしないから、一回だけで止めました。あれをやっていたら違ったかもしれない。

せんね。

飯島 貰えば良い。(笑)

三村 私事ですが、第一号から編集委員をやっています、五月に編集会議をやり、色んな計画を立て、十二月には発刊すると、そういう予定だった気がします。加藤先生のお話を聞いたり、編集会議は楽しかったです。

加藤 三村先生の話も面白かったよ、飲み屋行つてどうだとか、親父(三村貞雄先生)がどうだとか。青森の津軽弁の話も。なんか氣負ったところも無かったし、上田智夫先生が四号か五号になった時に、最初に三号まで行けば良いと言っていた。それまでやりましょうやと。氣が付いたら十号も過ぎ、高橋さんも苦労したけれども。

三村 そういう意味では、高橋君は影の功労者です。二十号の時にも危機がありました。編集委員から、二十号で終わりにしよう、意見が出た事がありました。編集委員が交代した事により、私は残りましたけど、二十二号、二十二号と発刊されました。

黒光 引退したんだ。

三村 若い先生方にお集まり頂いたの

で、続きました。

加藤 本というのは、ある程度続くと、一人で続いて行くものだね。あまり光らなくても。

飯島 一人で続くわけではなく、皆一生懸命やっているからだよ。

加藤 今回は変わった企画で出そうかと言うと、かえって駄目ね。最初からのものが続いていくと、なんとなく続きます。

堀尾 原稿を出そうとする時に、皆さんの文章がうまくて氣後れがする。

加藤 お父さん(堀尾行彦先生)の想い出を書いたものを出しましたね。

曾田 参加しているだけで、なかなか皆さんに付いて行くのが大変な感じですよ。

加藤 三村先生、なかなか書かなかつたね。座談会のテーマは出してくれたけどね。

三村 そんな、書きましたよ。

加藤 詰まんものを覚えているものだね。四奇人の時に幕西町の「丸山」を使つたでしょ。

高橋 私ではなく、青木茂事務長の時だと思っています。

加藤 誰が書いたんでしたっけ、深瀬政俊先生のこと。検査も要らないと、開田吉廣先生でしたか。

黒光 開田先生の息子さん（開田博之先生）が書いた。

飯島 原稿書く人に頼んでおけば、皆集まって。

齋藤（修） 上田智夫先生が居なくなつたのは寂しいですね。

飯島 本来なら、上田智夫先生、大久保洋平先生がここに居なければ話にならないんだわ。曾根清孝先生が居れば一番いいけど。

黒光 裏話いっぱい。曾根清孝先生も駄目だな、今は退院したが。

齋藤（修） 永い間、苦勞さんでした。まだ、これから波久鳥に代わるものが出るかもね。

齋藤（甲） 有りそうですので。

齋藤（修） プラスアルファね。

飯島 若い人に譲るかい。

齋藤（甲） それ良いですね。

齋藤（修） 齋藤先生（甲）はまだ若い方だもね。

齋藤（甲） いえいえ、ロートルですから。

親交会の財政

三村 親交会は利息で事業を行つてきたので、財政が苦しくなつてきたのはここ十年だと思ひますが、金融情勢が厳しくなつてきて、プールしたお金の意味がなくなつて来、財テクを我々がもう少し真剣に行なえば、もつたのかも知れませんでした。

齋藤（修） 先生方も揃つており、親交会会長の立場も有りますので、一言。金融情勢の変化を見て時間を稼いでいたのですが、厳しくなるばかりです。で、役員会で皆さんからお預かりした積立金は全額返そうという事となり、解散の方向となりました。会長になって永いのですが、壊したものが随分あります。両センター（急病センター、検査センター）もそうですし、原田一洋先生、上田智夫先生が創つたものを力が無くて申し訳ないのですが、こういった伝統になつています。

黒光 旅行の時に、昔は現金を持つて行つた。

齋藤（修） 利率の良い時代は財政が

豊かだった。

三村 父（三村貞雄先生）が亡くなつた時には、積み立てたお金の他にプラスアルファが有りました。

飯島 一番良い時期だった。

大岩 親睦を図るということとで親交会の運営は、適切だったと思ひますよ。

三村 規約改正もありましたが、先生方には悪いですが、ご家族は亡くなつたらお金が貰えた。

飯島 昔はもつと貰えた。

黒光 亡くなつてから貰つてもな。

（笑）

三村 変わる時代、全てを壊していかなければならない。その中で新しいものをどのように創造してゆくのか。どのような会を今後創つていくか。

齋藤（甲） もうお終いですよ。

大岩 親交会は行楽会、旅行をやり、本当の親交を行なつてきた。

東 親交会亡国論を一時述べていましたが、医師会報に掲載されていますが、退くというのは大変だと思ひます。昔から、撤退する殿の侍大将は一番苦勞する。うまく撤退したということは大した人格者である。

加藤 第二次大戦の終戦内閣みたいにお手数かけますな。

斎藤（修） そういう役割なのです、私は。

飯島 元の役員が自分の時には止めたくないと先送りにし、皆ここに來たのです。

若い会員

三村 若い先生方は親交会どうお考えだったか。もう解散したのですけど。

松村 正直なところ、医師会以外の顔が見えるのではないかと入会しました。地域の先生方と早く馴染むには良い会だと思っています。

生田 一番初めの事がわからなくて、スタートがそうだったと歴史を伺って、そういう組織だったと始めて知りました。医師会と親交会というのが良くわからなくて、他の町にはそういった組織が無いものですから、開業したら同時に入るものと入会しました。あまり参加できなく、協力も出来なく先輩たちの活躍にはたどり着けなく終わったという感じです。

鴨井 行事委員会に参加していて、利息で運営していくという事を知りました。利率が好転するだろうと、期待しているのと逆に厳しくなり、かといって

行事は決まっていかなければならず、皆さん苦労していました。もうこれ以上お金の苦勞をしたくないという限界点が來たのかなと思います。会としてはユニークなものだったと思いました。

斎藤（甲） ひとつ会計の苦勞がなくなり嬉しかったです。九十五名の会員に積立金の返還を行いました。お一人だけ現金で、それ以外は銀行口座への振込で宜しいと、裏表の無い先生方だったと理解しています。忘年会等が寂しいのですが、今回解散するに当たって、お金が残ります。良い話なのですが、医師会へ寄付することとなります。

余談 軍医

飯島 親父さん（鴨井清一先生）幾つになった？

鴨井 八十六歳です。

斎藤（修） 鴨井清一先生も元気ですよ。ね。

黒光 ゴルフコンペでハーフで止めました。

飯島 行くだけでも良い。

加藤 座談会の話になるけど、國本鎮雄先生、「大和」の乗組員で千何百人死んで、三百六十名位の生き残りなのです。初めの頃の士官の事は書いていますが、大和のことは書いていない。私が別府の海軍病院の時に、廊下で彼が耳をやられて、高射砲の分隊長だったから、耳やられて帰って來て、ただ、緘口令が布かれてましたから、「大和」に関しては。彼は中学校で私の一級下の、あつ、似ていると思う「おい、國本でないか」と言ったら、彼は上官、桜がひとつ多かった。

飯島 大尉だった。

加藤 私は少尉だったが、彼は中尉でしたので。

黒光 二階級特進で帰ってきた。

加藤 二、三回、私の部屋で室蘭の話などをしました。お父さんが耳鼻科でしたから、帰郷療養ということで、室蘭に早めに帰ってきました。フィリピンの時に軽巡洋艦「阿武隈」に乗っていたことは書きましたが。

黒光 彼は「阿武隈」でも沈んでいるんだ。二回沈んでいる。

斎藤（修） すごいね、二回沈んで生きて帰って来たというと。

加藤 彼に大和を中心とした何か厳しい体験を書いてくれれば良いんだがなと思っただけで、書かないな。

斎藤（修） 書かないんじゃない。

鴨井 医師会の会合で、お年寄りの方が多くて、私だけがボツンと加わった時にお隣に居られて、お酒を飲みながら大和での生還のお話だけは聞いた事が有ります。

三村 私の父（三村貞雄先生）は中佐だ。

東 前々回の医師会史見れば、全部出ているよ。あれにはびつくりした。（笑）

加藤 海軍軍医だと、東室蘭駅前の大西 清先生もそうだった。

飯島 だいたい遅くまでゴルフをやっていたよ。

加藤 私が中学を出たのは昭和十六年、開戦の年。室中の二〇回で、もう出れないんです。海軍でも表に、沿岸に出れないわけ、同期で成績の良いやつ十人位、艦隊指令に乗って、北方しかな

かったけど、半分死んで、私が四年の時に兵学校に行った菊池というのが、潜水艦で終戦のちよつと前に太平洋で沈んで死んで、戦死は居ないのよ。軍人になったのが少ない。

東 乗る飛行機もない、船もない。

加藤 出たくても、もう表に出れないから。大正一桁、明治の終わりの人が一番犠牲だった。中佐というと、軍医長だわ、偉いね。（笑）

飯島 波久島とはあまり関係ない話だ。

三村 親父が言っていましたけど、最後は大阪の海兵隊病院の院長になったとか。

おわりに

斎藤（甲） 今日は最終号の座談会ということで、親交会に残りの方々にお集まりいただき、有難うございました。ようやくこれで終わりなのかなと。

斎藤（修） これからという事もありますので、力が入っているのは波久島でもありますので、発行するのにもお金がかかりますが、斎藤（甲）先生の

お話のように若干のお金も残りますので、まず二十三号を発行していただいて、その後皆さんの意見を聞きながら、永く取り組めるように検討していきたいと思ひます。親交会で行なってきた行事につきましては、医師会内に総務委員会を設置しましたので、その中で忘年会等の行事を担当することになると思ひます。今後ともご協力をお願いします。

三村 今日は本当にお集まり頂き有難うございました。



あらくいす



親交会野球の写真

飯島 三男

波久鳥創刊号の稲葉 真先生の文章で野球の事に触れていますが、そのページの写真は私の所に有ったものでして、もう一枚の写真と共に再掲させていただきます。

石狩に行かれた三好晃二先生と私以外は全て故人となりました。

昭和三十七年の層雲峡の懇親旅行のバスの中で「野球出来るか」と尋ねられたので、「球拾いくらいは」と答えたら、そのまま上田智夫先生と共に補欠に入られました。

しかし、試合の度に九名のメンバーが集まることは少なく殆ど何時も出場させられる状態でしたので、戦力低下で申し訳なく感じています。

その上、高橋繁介先生・大岩昌生先生のお二人がアヒレス腱を、続いて細谷俣先生もと次々と怪我人が出てしまいまして、補欠を入れてもメンバー足りずとなりまして、その写真の「あくび」をして

いる少年（多分、伊藤 貢先生の息子さん）まで出て貰う試合もありました。

中島勝美先生・狩野正直先生・山本健三郎先生も早くから部員でしたが、その後は原田一洋先生・遠藤秀雄先生・下地晋先生・東 栄先生・大久保洋平先生等が参加されましたので、大いに盛り上がりまして結構良い成績だったと思います。

最後の試合は何時、何処で対戦相手と勝敗等は忘れましたが、ユニホームは大事に持っていますので医師会にお返ししようと思っています。

結成時のメンバー

総監督 斎藤義太郎

監督 佐藤善弘

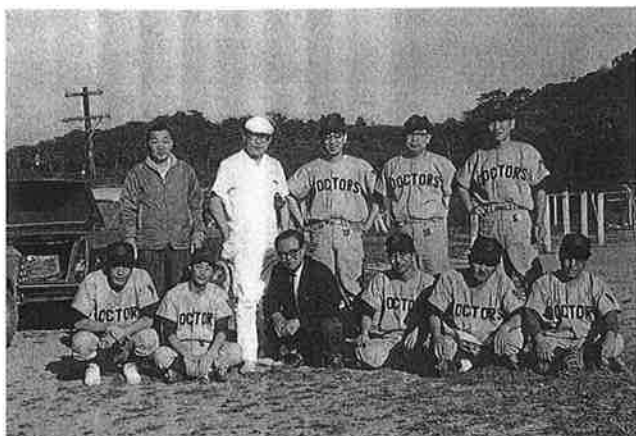
主将 細谷 俣

投手 三好晃二

捕手 阿部昭治

内野手 稲葉 真、高橋繁介、伊藤 貢、山本健三郎

外野手 成松高明、中島勝美、狩野正直、飯島三男、上田智夫



左から



親交会の思い出

鴨 井 清 成

(鴨井内科医院)

親交会の機構改革に伴ない会誌「波久鳥」も最終号を迎える事となりました。世の経済不況や、医療経済改革等の医学、医療の変革期のなかでの新たな対応であらうと思います。

室蘭市医師親交会は、斎藤義太郎会長(後の北海道医師会長)の時代に、医師保険医総辞退の重要な課題に向け、会員相互扶助の為の備蓄として行なわれたと聞いております。私は開業の翌年昭和三十七年に入会し、これまで四十一年を経過し、その間には五十五年に会誌「波久鳥」も発刊されました。

親交会の備蓄の果実は会員の親睦に多くの貢献をして参りました。特に旅行、海外旅行での思ひ出多く、香港、台湾、最近では沖縄、サイパンがあり、その頃、は道医師会でも珍しい医師会旅行でありました。香港では酒豪の、東老先生は痛風の為に旅行が危ぶまれましたが参加さ

れ、「紹興酒のお蔭で治った」と帰りは元氣であつたし、又台湾では柘植先生に、有名な「端溪の硯」を買いに付き合われたり、港南の阿部先生とは、現地の旅行社との珍味の大宴会をしたり、その他、観光に、グルメ、ゴルフと色々若くて元氣な良き時代の思ひ出があります。

老ひたりと云えども、又、医師会の新しい親交会に参加して、親睦の実を挙げ、る事は医師会発展の爲となると思つてます。

波久鳥

松田 史明

(とんけし耳鼻咽喉科クリニク)

私が「波久鳥」に文章を載せていただいたのは北川正樹先生の追悼文のときでした。生来の筆不精のため一度きりになつてしまい、誠に申し訳なく感じております。編集に携われた先生方には大変なご苦労があつたことと存じます。有難うございました。そしてご苦労様でした。

昔、捕鯨基地の室蘭港。

鴨井 清一

(鴨井整形外科医院)

明治末期から、大正、そして昭和二十四年まで、室蘭市民の心を躍らせる音が、鳴り響いた。捕鯨船の汽笛。「ポォーツ、ポォ、ヴォーツ。」と三度鳴ると、祝津の浜に皆が走つて行く。鯨が捕れた合図なのだ。

室蘭と鯨の付き合いを知る人はもう少ないが、室蘭噴火湾近海は、昔から、鯨・イルカの遊泳地で、古くは、一二百年前、寛政十一年に幕臣遠山金四郎景普が、エゾ地調査中、鷺別の休憩所にて、鯨の群を見て「遙かに鯨の潮吹を見る。絵窓の如し。」との記録を残し、又明治五年(百二十八年前)オーレス・ケブロンは室蘭札幌新道建設の際、数千の鯨、イルカの大群の遊泳する状況に驚嘆し、尚、明治七年には、長崎県から室蘭に配置された漁師十一人による鯨との格闘劇が演じられた。又、明治八年に、追直浜に漂着した、寄鯨を売り、建立基金として八

幡宮が建設され、別名「くじら八幡」と言われた。又、絵鞆小学校では、鯨の顎骨が、校門の代りとなつたのである。

そして、明治四十五年七月、室蘭区絵鞆村に東洋捕鯨株式会社設立され、捕鯨用キャッチャボート二―三隻が就航し、そして大正三年四月には、ボン・シクツシの水面を埋立てて、新工場を造り大活況を呈した。

尚、大戦中の水産統制で、日本水産に衣替えて、昭和十二年に一時閉鎖されたのを、戦後二十一年に再開し、二十四年に全面撤退するまで、捕鯨活動が続けられたのである。

尚、捕鯨は、地球岬から日高沖えりも岬、恵山沖にかけ、噴火湾、尻屋崎まで、鯨を追つたのであつた。

捕鯨の最盛期には、六・七・八の参ヵ月で、大正二年から四年がピークで、二年には、百六頭、三年八十六頭、四年六十七頭を射止めている。主にマッコウ鯨で平均して、十五米から二十米。時には、二十五米以上のナガス鯨がとれ、五十屯位の重量があつたと言われている。

浜では、船が着くとロープで土場に引き揚げ、ナギナタの様な大包丁で切裂か

れ、海は鯨の血で真っ赤になった。

町の女学校の生徒が、先生に連れられて見学した事もあったと言う。

鯨は、輸出用の肉が室蘭から神戸、横浜へ、道内には赤肉が出回り、街では鯨肉売りの荷車が町内を連呼し、当時牛肉や豚肉より、安くてうまい鯨肉が飛ぶ様に売れ、骨は肥料に、鯨油はグリセリン、ひげは、工芸用品にと、すべてを使いきったのである。

昭和六年六月、体長二十米以上のシロナガス鯨がとれた。おおきな顎骨と耳骨を繋ぎとめ、絵鞆小グランドに、校内アーチに建てられて「鯨の学校」として絵鞆っ子のシンボルと成ったが、昭和二十七年、市内初の円形校舎が建てられた時に、撤去され、水族館で保管して来たが、平成十年頃、風化が厳しく、碎かれ灰として処理された。

又、東洋捕鯨会社は、大正七年開催の開道五十年、北海道博覧会で、名誉金牌を受賞し、いち早くノルウェー式キャッチボートによる捕鯨方法が認められたのであった。

鯨の町の面目躍如、半世紀前の工都室蘭の知られざる一面だったのである。

戦争は果てしなく。

後藤 正邦

(三愛病院)



私が「波久鳥」に投稿したのは、後にも先にも唯一度一九八七年第八号であった。「ニューヨーク八日間の旅」と題して、あれこれたまたげた事を書いてみた。世界の貿易センター・ツインタワーの南側2WTC・一〇七階の展望室から、ニューヨーク・ニュージャージーの夜景を眺めて、その美しさにたまたげたものである。WTCは一九七三年に、エンパイアをしのぐ高さを誇るビルとして完成した。日系二世のイサム・ノグチの設計で、建設には我が国の鉄鋼メーカー・商社が

深く関与している。したがって日本人には親しみ深いビルであった。それが僅か二十八年ではかなく消え去った。

一九八五年、ブッシュ・ゴルバチョフ会談で米・ソの冷戦が終結し、一九八九年にベルリンの壁が撤去された。その時私は、もうこの世から戦争はなくなっていくのではないか、何とか長生きして世の行く末を見たいものだと思った。私の期待は見事に裏切られた。局地戦争は絶えることなく続いている。日頃何気なく口ずさむ「イマジン」から、ジョン・レノンのひたすらな想いをしみじみと感じる。

さて、我が家では猫の額ほどの庭を造ったが、その猫にとつてやわらかい土の上で排泄することが、無上の喜びであるらしい。猫とかみさんの戦いがつづいている。「ドラ猫にげる」など、いろんな薬品を使ってみたが効果は上がらない。あちらこちらに小石を置いて、猫を見つけたら小石で撃退している。当たるもんかと馬鹿にしたような態度ですらかる猫をみると、腹立たしくもありかみさんが可哀想である。やはり、戦いは無くなりません。

最近気になる日本語

柳川 志 公

(柳川内科医院)

最近日本語で気になる事が二つ有りまして。

言葉は時代により変化し、それが正しい国語になって行くのだらうと思いますが、それは数十年、数百年と云う間の変化であらうと思います。五年十年足らずで変化してしまうのは問題ではないだらうか。

前置が長くなりましたが、気になる事の一つは「すごい」と云う言葉です。「すごい」は形容詞ですから活用が有り、すごかるウ、すごかつタ、すごくナル、すごい、すごいトキ、すごければと変化し、美しい、甘い等の前につける場合は、すごく美しい、すごく甘いと連用形が正しいと思うが、いつの頃からか若い人達が、すごい美しい、すごい甘い(終止形又は連体形)と云う様になってしまいました。最近では年配者や時にテレビのアナウンサーさえもその様に使うことが有ります。時には私自身も使ってしまうそ

うになります。

今一つ気になるのは、子供の名前がこ、数年急に变化してきた様に感じていたのも、先日市の予防接種の立会の折に子供の名前をメモしてみて驚きました。

一時間に四十五人前後だったと思いますが、このうち正しい日本語ではないと思われる名前が二十人前後ありました、次の名前を読んでみて下さい。

彩花サヤカ、陸王リオウ、彩音サヤネ、萌好メイ、寛大カンタ、飛虎ヒトラ、愛夏マナツ、彩華サヤカ、陽也タカヤ、颯人ハヤト、弥亨ヒロアキ、真心ハート、桜桃チェリー、琴都コト、由岳ユタカ、希水ノゾミ、咲輝サキ。彩を全てサヤと読んでいます。辞典を引いてみましたがサヤとは読まない様です。

子供は一生正しい日本語では読む事の出来ない読み方で呼ばれなければならないと思うと、その次の世代はどうなるのだらうと心配です。

市の保健婦(師)さんは、正しい読み方で読んだのにお母さんから違いますと抗議されたと苦笑していました。

出来るだけ正しい日本語の範囲で命名してもらいたいものです。

セブン

柳川 議

(柳川内科医院)

会員の皆様方の中には、スポーツカー好きの方が少なからずいらっしゃると思いますので、以前に乗っていた「バーキン7(セブン)」というクルマをご紹介します。

―購入までの経緯―

今から十一年前のある日、東京の環状八号線を走行中、ボルシェ550スパイダーやACコブラ、フェラーリのレーシングカー(よく見ると全てレプリカ)を置いてあるクルマ屋を見つけた。店頭には数台ケータールームスーパー7に良く似たクルマが置いてあった。それがバーキン7である。店内を覗くと、頼みもしないのにバーキン7のキーを渡され、試乗することになった。軽快なハンドリング、キャブレターの吸気音、豪快な排気音、とてつもないスピード感。あまりにも運

転が楽しく、翌日には契約をしてしまった。

―バーキン7とはどのようなクルマか―

ロータス7(セブン)というイギリスの古い小型オープンスポーツカーのレプリカで南アフリカ製である。鉄パイプを溶接して組み立てたフレームにアルミパネルをリベット止めたボディの、見た目にも、構造的にも単純なオープンのスポーツカーである。パーツはフォードやワーゲンのものを流用している。ネジやリベットが足りなかったり、部品が合わなかったり、日本の自動車メーカーの人間が見たら卒倒するような造りである。

全長×全幅×全高13.6×1.6×1.1m、車重590kg、排気量1588cc、出力130馬力。最高速はメーター読みで160km/h(それ以上はクルマが分解してしまいそうで試せなかった)、130馬力と大したことは無いが、車重が軽いため加速は良い。

シートの高さは地面から約15cmと極めて低く、手を下ろすと地面に指が届き、目線は前車のテールランプ位の高さであ

る。ドアも窓もないため風の巻き込みが激しく、乗り心地は極めて硬く、うるさく、夏暑く、冬寒い。しかし、スポーツカーが好きな人なら誰でも病み付きになりそうな程運転は楽しい。



バーキン7

―ある夏の終わりのドライブ―

前日夜。クルマ全体のボルト・ナット

の増し締め(400〜500km走行するとあちこちのナットが緩む)。フレームにひび割れが無いかチェック。オイル・水・バッテリー液量を確認し、プラグの焼け具合を見る。アクセル・ブレーキ・クラッチワイヤーにオイルを注し、タイヤの空気圧を調整し、ボディをピカールで軽く磨いて走行準備完了。

夜明け。快晴、気温20度。暑くなりそうな気配。Tシャツ、フライトジャケット、帽子、ゴーグル、ドライビンググローブ着用。

ボンネットがきちんとロックされているか確認し(以前ロックし忘れてボンネットを飛ばしたことがある)、うるさいクルマなので、車庫から道路までクルマを押していきエンジンをかける。

アクセルを三回軽く煽り、やや間を置いて、キーを回す。セルの音を聞き、タイミングを見計らってアクセルを踏み込む。無事エンジン始動。ここで失敗するとプラグの清掃が必要になる。アクセルを軽く踏みアイドリングさせ、少し安定したところで出発。オイルが暖まっていないのでゆっくり走る。水温計の針が上昇し始め、変速も滑らかになり、暖機運

転終了。

用賀から東名高速に乗る。約一二〇キロで走行。風の巻き込みと排気音で同乗者の声はほとんど聞こえない。身振り手振りを交えて会話をする。

まだ日が昇り始めたばかりなのに、ロータスヨーロッパの集団やアルファロメオ、ヘルメットをかぶり本気で走るスーパーセブン等マニアックなクルマが多数走っている。平日の東名高速とは別世界である。

小田原厚木道路、真鶴を経由して湯河原へ。湯河原温泉をぬけて、椿ラインに入る。ここは曲がりくねった峠道で、湯河原から箱根の頂上まで続いている。いつもの道なのでカーブは全て覚えている。アクセル全開で、ひたすら走る。愉悅の境地。

大観山パーキングで休憩。既に多数の旧車、スポーツカー、バイクが止まっている。先程のロータスヨーロッパの集団もいる。

缶コーヒーを飲んで出発しようとするがエンジンがかからない。近くにいた2人のライダーに手伝ってもらい押し掛け。1回でエンジンがかかり、二人に挨拶

拶し十国峠に向かう。ここで、ロケットというイギリス製の珍しい車に遭遇。おそらく日本に数台輸入されている程度だろう。

伊豆スカイラインに入る。まだ時間が早く交通量は少ない。高速コーナーが延々と続いている。エンジンは絶好調、思う存分走る。終点の伊豆高原に近づくと標高も下がり、除々に暑くなってくる。風切り音と排気音の合間に蝉の合唱が聞こえてくる。



景色が流れるように、
後ろに飛んでいくところ

伊豆高原の喫茶店に入る。駐車場でバックしようとするが、ギアがバックになかなか入らないので降りてクルマを押す。よくあることだ。洗面所で鏡を見る

と、ゴーグルの跡だけが白く、他は煤けた自分の顔が映っている。まるで白黒が反転したパンダのようだ。風切り音と排気音のため耳鳴りがしている。

およそ三〇分後出発する。今度は1回でエンジンがかかった。国道一三五号線に出て、給油。国道はまだ渋滞していない。伊東の付近で、排気音が突然爆音になる。サイレンサー内のグラスウールが飛んだようだ。以前に一度修理したがまた壊れてしまった。応急修理のしようが無いためなるべく静かに走行する。

真鶴で昼食をとり、小田原厚木道路を抜け、東名高速に乗る。海老名付近から用賀まで断続的に渋滞している。蒸し暑さとエンジンの熱気でサウナに入っているような暑さ。周囲の好奇の視線もあり、ひたすらやせ我慢。

何とか渋滞を抜け、午後二時少し前に帰宅する。走行距離五〇〇km弱。軽くボディを拭き、無くなった部品が無いか確認し車庫のシャッターを閉める。整備は明日しよう。暑さと振動のため体がフラフラし、爆音のため耳鳴りがしている。満足感と疲れで頭の中は真っ白になっている。

ホームページの作成

小田切 醇

(小田切耳鼻咽喉科医院)

今年四月、オリジナルのホームページを作成しました。自分で撮ったデジカメ画像を季節毎に編集し、「パソコンの四季のアルバム」と名付けました。既に何人かの方に案内して見て頂いているので、ご承知の方もおられるとは思いますが、ここに至るまでのパソコン修行の経過を振り返ってみたいと思います。

IT関連として、ワープロ以外ファクスも携帯電話も使ったことの無い私でしたが、医師会の医療情報システムを作ろうとの話にショックを受け、これでは時代に遅れる、遅まきながらパソコンを勉強してみようと考えました。

二〇〇〇年暮、新聞広告を見て、ユーキャン生涯学習局のパソコン入門講座という、機器つきテキストつき電話サポートつきの通信教育に入会しました。機器はWindows Me搭載の東芝製のDynaBookでした。機種選定の良し悪しも判らない

ままに、全く貴方任せでした。ただ良かったのは、必要な教材セットが全部揃っており、プリンターや用紙類まで用意されている点でした。テキストの説明通りセットすれば、すぐ使用可能でした。標準カリキュラムは全課程を12週間(3ヶ月)で修了できるように作られているが、最大1年間まで受講生として指導が受けられます。尤もカリキュラム通りの進行はとても無理で、私の場合は一部はしょつても倍の6ヶ月掛りました。ワード、エクセル、インターネットと進み、その間判らないことは、サポートセンターに電話して教えて貰います。パソコンは一つ判らないと前へ進めません。懇切丁寧に対応してくれ、時には10分、20分も教えて貰い大変助かりました。

私が興味を持つて集中できたのは、年賀状に始まるハガキ作成でした。住所録作成からフォント選び、イラスト挿入と文章差込みと興味は絶えません。孫宛の誕生日祝い、雛祭り、運動会、ピアノのおさらい会等のイベントに合わせ、イラスト入りのハガキを送ったものでした。次いでのがん心は電子メールです。同じ頃神奈川県在住の娘がパソコンを始めた

ので格好のメル友になりました。ああだこうだと言ひ合ひながらの練習です。一寸したミスでも遠慮なく指摘され結構いい勉強になりました。尤も最近では携帯メールが主流になって、パソコンメールの機会が減りましたが、私は携帯宛でもパソコン送信の方が気楽に打てます。講座を通じて習得したのは、宛名に敬称をつけること、本文は1行35字以内に収めること、読み易くするためにテーマ毎に改行(1行あける)を頻繁にすること、できれば署名を入れること等でした。

6ヶ月後、デジタルカメラ活用講座に入会しました。機種はCASIOデジタルカメラ(30万画素)で、学習期間一ヶ月、受講期間6ヶ月のサポートがうけられます。早速庭の草花を撮りまくりました。そのうちズーム撮影やベストショットによる撮影にも馴れて、パノラマ撮影も可能になりました。画像をパソコンにコピーし、画像に様々な効果を加える手法を覚えました。こうなれば電子メールに画像を添付できるようになり、娘宛のメールも画像添付が多くなりました。結構楽しみながらの修行ですが、パソコンは親子の距離を縮めてくれます。

更に半年後、趣味のデジタル画像講座の案内を受け、受講することになりました。ソフトは Adobe Photoshop Elements^{アドビ フォトショップ エレメンツ}といい、画像の処理、加工が自由に行えます。画像の切り抜き、赤目修正、不要部分の消去、色調調整の覆い焼きや焼き込み等々の色々の機能を持っています。空に写る電線やテレビのアンテナの消去、海浜のごみも綺麗に清掃してしまいます。フラッシュ撮影による影も取り除いてすっきりさせます。レイヤーを使って画像の合成、吹きだし文字の挿入などの加工も可能です。スキャナを使ってフィルム写真を読み込み、画像処理をすることも出来るようになりました。

今年一月、ホームページ入門講座の案内があり、またまた受講することになりました。テキスト4冊よりなる、学習期間1ヶ月の教程です。テキスト①インターネット活用編、②電子メール活用編、③④ホームページ作成編からなります。ホームページ作成に必要なHTML形式と画像の圧縮、解凍の勉強をしました。電子メールもHTMLを使えば、文字の修飾も自在で、更に画像の挿入やBGMの添付も可能になります。ホームページ

作成にはホームページミックスというソフトを使っています。ひな型を用い、文章や画像を入れていきます。テキストに従い添削課題に挑戦。「パソ吉のぶらり旅」という題名で、旅のアルバム、気まぐれ日記、掲示板、便利なホームページ、自己紹介の各ページを作り講座に応募しました。その結果、テキストの内容をよく理解しており、満点という評価でした。

これに気をよくして、今までに撮ったデジカメ画像を編集して、「パソ吉の四季のアルバム」と名付けたオリジナルのホームページを作成しました。トップページに続いて、雪の造化！、野の花便り、百花繚乱、紅葉狩り日記、掲示板の5つのページを作りました。

知人に案内して閲覧して貰っています。多くの方々に掲示板の書き込みを頂いていますが、概ね好意的な評価を受けていることが嬉しい限りです。その後、春の樹木というページも追加し、画像も2回ほど更新しております。

趣味のデジタル画像講座の体験談の募集あり、応募にはスナップ写真と画像を添えることを要請され、画像の代わりにホームページのURLを送りました。折

り返し「貴殿のホームページは大変よく出来ており、会員の参考になるから、ホームページリンク集に登録するように」と奨められました。煽てにのって早速登録の手続きをとり、私のホームページも遂に全国区になりました。興味のある方は、是非次のURLにアクセスしてみてください。

<http://www.hpmix.com/home/aodagi/index.htm>

私のパソコン修行も丸3年近くなりますが、未だ初心者域をでないものの、やっと時代に追いつくところまで来たかなと満足感にひたる今日この頃です。



近況報告

鹿にぶつかった話

角 哲雄

(恵愛病院)

忘れもしない今年六月四日、午後八時頃の事でした。大学での用事を終え、前後を走る車のほとんど無い高速道路を我が愛車「ホンダオデッセイ」は登別に向かって順調に走行していたはずだったのです。それが、白老インターまで一キロのあたり、道路左側の斜面から一頭の鹿がピョンと飛び出してきたではありませんか。おそらく二〇〜三〇メートル前方、あーっと思うまもなく車の左前方が鹿に激突、無意識にハンドルを右に切ったのかもしれない、きづくと車は中央分離帯に激突寸前、今度はハンドルを左に切って間一髪難を逃れたというわけです。まもなくパトカーと道路パトロールカーがやってきました。鹿は即死。警察官がいうには年間数人以上の人が鹿との衝突で入院している、だから無傷ですん



だのはラッキーなんだそうです。

鹿が道路に出てくるのは午後四時から八時に集中しているという新聞記事がでたのはそれから間もなくのことでした。「動物に注意」「鹿に注意」という標識が立っているあたりは本当に動物が出やすいそうです。くれぐれもご注意を。まさに冷や汗三斗の出来事でした。

「私の闘病記」

堀 尾 昌 司

(堀尾医院)

今年に入って持病の腰痛に加えて、左下肢の疼痛、しびれが強くなり、寝ていても痛む様になった。「もはやこれまで。」と決心し、新日鐵病院整形外科を受診した。MRIで「椎間孔狭窄による神経根圧迫」と診断され、「後方進入腰椎椎体間固定術」の適応となった。入院期間三週間余りとの事で、開業医としては先ずその間の代診の先生を確保しなければならなかった。出身医局の旭川医大第一外科の医局長に頼んでみた。「四月以降は新入医局員の教育指導で人員が割けない。三月にして欲しい。」との返事だった。主治医の上金先生にお願いして三月四日に入院、五日に手術して頂いた。病室は、病院の取り計らいで特別室に入れる事になった。四人部屋のスペースを使った豪華ホテルの個室だった。電動ベッド、バストイレ、応接セット、大型テレビ、冷蔵庫、電話など何でも揃

っていた。スライドドアが付いていてプ
ライバシーにも配慮されていた。翌朝、
手術室へ向かった。麻酔科の先生の優し
い説明の後、マスクが当てられ酸素が流
れてきた。次いで静麻薬が腕を昇ってく
るのがわかった。その後は何もわからな
い。二〇分程うたた寝をしたような感じ
で、「堀尾さん！わかりますか？手術終
わりましたよ。」との麻酔科の先生の声
が目が覚めた。時計を見ると実際は二時
間余りが過ぎた様だった。

病室に帰ると、家族、同門の大谷先生
等いろんな人達が迎えてくれた。大谷先
生には色々と心配りをして頂き本当に有
難かった。当初はまだ麻酔が効いていた
のかあまり痛くはなかったが、二時間余
り経つと痛みがじわじわと襲ってきた。
術前に上金先生が「腰椎の手術は痛いで
すよ。」と、おっしゃっていたのが思い出
された。筋注の鎮痛剤がよく効いたが二
時間くらいしか持たない。看護師さんに
聞くと、痛み止め類は四時間に一回しか
使えないとの事。残りの二時間がつらか
った。ひたすら耐えた。翌日、麻酔科の
先生が回診に来て下さったので現状を話
すと「試しに塩モヒを使ってみましょう

か。」と言って下さった。塩モヒの効果
は絶大で、痛みは劇的に改善し、有効時
間も長く歩行器を使って歩行訓練まで行
う事が出来た。

入院患者にはやる事がない。検温、回
診、食事以外はひたすら暇である。健康
時は日中患者さんの診察に追われ、夕食
後に紹介状、診断書、介護保険申請書な
どの残業をこなし、医師会の会合、勉強
会、介護保険審査会などに出席してい
ると、自分の為のまとまった時間を確保す
る事がけっこう難しかったので、贅沢な
悩みではあった。病室はパソコンなどの
電子機器の持ち込みが禁止されているの
で、体が思うように動かない間は本を読
むかテレビを見るかしか時間の潰しよう
がない。お陰で文庫本の「竜馬がゆく」
(司馬遼太郎)全八巻を余裕を持って読
み切る事が出来た。

テレビでは連日イラク情勢を伝えてい
た。アメリカの最後通牒がなされ、やが
てバグダッドにミサイルが打ち込まれて
戦争が始まった。ブッシュは「正義の戦
い」を、フセインは「聖戦」を主張して
いた。両者とも自分に都合の良い正義を
振りかざし、国連は何も機能しなかった。

恐ろしい時代になったものだ。一日に何
回も流される戦場の映像と、軍事評論家
の嬉々とした表情を悶々として見つめて
いた。

それ以外の番組では、午前中の民放は
奥様向けの通信販売番組と芸能ゴシップ
番組だらけである事がわかった。NHK
以外どのチャンネルも同じようになくだら
ない内容だった。NHKはまじめな内容
なのだが、おもしろくない。見たい番組
は夕方九時以降に多かった。九時消灯な
のでイヤホンを買って音を出さずに見て
いた。個室の良い所だ。

私は普段午前一時前後に寝る宵っ張り
で、寝酒の一杯を何よりの楽しみにして
いる。病室では昼間も寝ているし、九時
の消灯なのでリズムが狂って眠れない。
当然ながら酒も飲めない。術後しばらく
の間は不眠で悶々としてしていると、スライ
ドドアをゴロゴロと開けて看護師さんが
定期的に巡回にくる。足音を立てない様
に気遣ってくれる。余計な心配をさせて
はいけないと思い、最初のうちは寝てい
るふりをした。彼女はライトをかざして、
ドレーンの排液などをチェックしてから
帰っていく。しかし、こちらも次第にコ

ッがわかってきた。睡眠導入にラジオの深夜放送が有効なのだ。周囲が静かである事に関心が向いてしまうと眠れない様だ。内容が面白くてもつまらなくても音量をしばってイヤホンで聞いているといつの間にか眠りに入っている。退院してからは不眠症に悩む患者さんにもこの方法を勧めている。

歩ける様になると、体力回復の為に病院内を歩いた。左足の痛みは見事に消え去っていた。外来の廊下を歩いていると、しばしば患者さんや、MRさんから声を懸けられた。「先生、どうなさったんですか？」その度に立ち止まって説明しなければならぬので、後半は専ら手術室前の廊下を利用するようにした。

旭川医大の先生達は、公務員のアルバイト時間制限があるので、私の入院三週間余りの間、一人二三日間ずつを受け持つ形で交代で来て下さった。ベテランでは私の同期で大学時代の野球部の仲間でもある稲葉助教授から、若手では医師になって二年目の女医さんまで自家用車、あるいはJRを利用して片道二五〇kmの遠路を来て下さった。宿は新日鐵病院に近いホテルを用意させて頂いた。皆

さん熱心に患者さんを診て下さったので、患者さんからの評判も大変良く、私の外来より賑わう日も少なくなかった。カルテも丁寧に書いて下さった。紹介状も詳しくしたためて下さった。救急車に同乗してAMIの急患を送ってくれた先生もおられた。中には大学の仕事の都合が付かず、日帰りをされた先生もおられた。往復で五〇〇km以上の運転、更に診療の疲労を考えるとまさに体力の限界に挑戦する様な応援であつたと思う。開業してから最近までは医局とはとかく疎遠になりがちで、忘年会位にしか顔を出していなかった私だったので、ここまで医局がしっかり支えてくれるとは思っていなかった。医局員時代、犬に代用血管を移植する実験で夜遅くまで苦勞を共にした仲間もいたが、名前と顔が一致しない若手の先生も多かった。この度ほど医局の仲間の有難みが身に染みた事はない。最後に素晴らしい手術をして下さった上金先生、長汐先生、はじめ病院スタッフの皆さん、お忙しい中お見舞いを頂いた医師会の諸先生、遠い旭川から応援して下さいました医局の皆さんに衷心より感謝を申し上げます。有難うございました。

近況報告

開 田 吉 広

(開田医院)

昨年6月喜寿を迎えました。

平成9年9月、「腰椎管狭窄症」で約1ヶ月間札幌S病院に入院、手術を受けました。一時は非常に良好な経過で、歩行もほぼ正常に近い状態になりましたが、術後のリハビリが不真面目で、2、3ヶ月目位より、段々再び歩行が円滑に行かず杖について歩く様になり、次第に外出が億劫になり、下肢筋萎縮が目立って来ております。椅子に座っていると、全く正常人と変りなく、外来の患者さん達に先生は何時も元気ですねと云われ、お蔭様でと元気なふりをして居ります。

息子が診療所が手狭になったので、新しく建てたいと云いだし、新築を決意致しました。少し広々と近代的にとの希望もあり、私としては昭和37年当地で開業以来3度目の新築となります。昨年9月より、新診療所で診療を開始して居ります。だんだんと世代交代の時期を痛感し

て居る昨今です。

札幌の娘の近くに、夫婦2人用の小さなマンションを購入、時々逃避行(?)をきめこんで居ります。出札すると、近くの美術館に行ったり、キタラでのコンサートを聴きに行くことを楽しみにして居ります。

外来には毎日出て居りますが、専ら昔馴染みの患者さんを診る位で、それも診療と云うより、昔話に花を咲かせている時間の方が、多い様です。他は薬屋のセールス相手の世間話に時間をさいている様な毎日です。

それでも、各種健康診断、各種予防接種の予診、etcおこなって居ります。又40年近く続いている当地駐屯の幌別陸上自衛隊の嘱託医として、週3回診療を行って居ります。後は年2回の保育所(園)園児の定期検診を続けています。その他は一切の公職を辞して居ります。

そろそろ引退も承知して居りますが、白衣を脱いだら只の人で、可能な限り何かをして頑張りたいと思って居ります。

以上簡単に近況を書きましたが、何にも拙文で申し訳ありません。

欄筆するにあたり、皆様方の今後益々

の御健勝と御発展を祈念致すと共に、室蘭市医師会の更なる御繁栄を心から祈念致します。

近況報告

福 永 純

(福永医院)

今年の春、古い釣竿が出てきて以来、週末は時々釣りに行くようになりました。もう十七、十八年前になりますが、石川県能登半島の宇出津総合病院へ出向していた時に使ったもので、その外科医長が釣り好きだったため、患者さんの術後状態が良ければ「黒鯛、釣りに行かんけ」と夜釣りによく誘われました。

室蘭では祝津や追直の岸壁で古い釣り竿から糸を垂らしてみますが、黒鯛のような強い引きはなかなか実感できず、アブラコやハマオトコ、カレイなどを釣って喜んでいます。

室蘭の中心が中島地区に傾いたとはいえ、途中で通り過ぎる中央町周辺は、往時の室蘭が感じられて懐かしさが沸いて

きます。舟見町に市営住宅の古いアパートが残っているのを見つけ、昭和三十年代、仙台から赴任して来た父が住んでいたと思われる所を探してみました。

昨年度の医師親交会の解散に伴い、波久鳥も最終号を迎える事になりましたが、父の時代の先生方をはじめ多くの諸先生方の旅行記や多才な趣味の発表の場として皆様に親しまれていただけたに、時の流れの中にも一抹の寂しさを覚えます。長年続いた伝統の上に立つてみると、いろいろと参考になる事もあるかと思えます。昔のことが日々忘れ去られていく中で、これからの時代が今までより更に忙しく速く過ぎ去るのであったとしても、時代に応じたユニークなものにできれば、情報交換、親交の一つとして、十分意義のある波久鳥になっていく可能性ありと思えます。昨今の目まぐるしく変化する医療情勢の中、忙中閑ありて一時釣りに没頭しているところです。



波久鳥最終号によせて

塩澤英光

(東室蘭病院)

良きにつけ悪きにつけ、最盛期から衰退期にかけてお付き合いさせていただき、これからも、その医師会の中で生きて行かざる終えない医師という職業ですが、たぶん無くなることは、ないと確信します。病診連携や症例検討会などは続いていくはずなのに、それなのに医師親交会のお別れ会とか最終号とかいう事態に直面すると、なんとも居たたまれない気持ちになります。それでは、何とのまたは誰とのお別れになるのでしょうか？

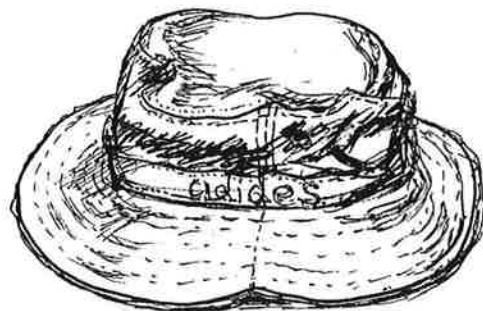
親交会でしかお会いできない方々や、これから親交会でお会いするはずだった新規の方々でしょうか？いやいやもしも、語ろうとするならば室蘭市医師会のインターネットホームページの会員の広場などに投稿すれば可能と思われます(さて)ここで、ホームページをのぞいてみてください、医師会役員委員のところ

で斉藤光史先生がまだ生きていらつしや

ることになっていますね。。。私も暗唱番号を忘れていますが、あまり大きな事は言えないかも知れません)ここでは、利息で運営されていた旧体制とのお別れになるかと思われれます。医師親交会や波久鳥に対して、有り難うとか、さようならとか、御免なさいとか言いたい事はいっぱいあるのに言葉が出てきません。

話は変わりますが、私の父は、比較的早く亡くなったので、出来ればしばらく死ぬ前に一緒に仕事をしたかった(反対の意見のある方もおられるようですが、それはおいておいて)いやじつくり人生についてでも話をしたかったと思っています。年取った方々とは、死ぬ前に、勤務医や若い方々とはよりいっそう、機会を持って話をしていきたいし、意見交流の場が必要だと、ある種の間や機会を失ってみて、あらためて思い起こされます。

※事務局 注意不足で済みませんでした。原稿到着と同時にホームページを更新させていただきました。



編集室へのお便り

此度は恒例の親交会誌「波久鳥（第22号）」をご恵送頂き有難く御禮申し上げます。編集の方々も時代変りで私がお世話になって居た頃の殆んどの方のお名前がなくなり将に歳月の経過の早さを実感致しました。

医師会また親交会の益々の御隆昌と会員諸先生の御健勝ご活躍を衷心より念じ上げて居ります。

札幌市中央区宮の森一条

十五丁目一番十五号

小國 親久

（十三・十二・八）

室蘭市医師会を退会して既に28年たちました。会員の方々も多くは世代交代されましたが「波久鳥」はなつかしく讀ませていただいております。会の益々の御発展と加藤治良先生の御健筆が更に続きますように。

静岡市大谷三八〇〇一九二

一方井 卓四郎

（十三・十二・八）

師走の寒さもひとしおの今日この頃で御座居ます。

その節は本当にお世話になりました。又この度は波久鳥をお送りいただきましてありがとう御座居ます。早速仏壇に供えさせていただきます。正樹の写真に向って大きな声で讀み聞かせて折ります。

松田先生が登別に御開業なさった経緯も始めて知りました。正樹は言葉の足らないところがありました様で、私共や他人様とも過不足のない会話が出来る様に躡けるべきだったと後悔致して折ります。

主人は何度か登別へ参りますのですがいづれ私も参りたいと存じて折ります。お寒さの折柄どうぞ御自愛下さいます様に。

波久鳥有難う御座居ました。

函館市人見町十二―八

北川 内

（十三・十二・九）

図書資料ご寄贈についての御礼

時下、ますますご清祥のことと存じ、お慶び申し上げます。

このたびは、下記図書資料をご恵贈賜り厚く御礼を申し上げます。早速整理保存のうえ広く市民の方々にご利用頂く所存でございます。

今後とも、よろしくご協力下さいますようお願い申し上げます。

室蘭市本町二―二一五

市立室蘭図書館

（十三・十二・十二）

皆様には御健勝の事と存じます。今度は波久鳥をご恵贈いただき有難とう御座います。

会員の先生も若返りまして、小生の先輩にあたる先生も数少なくなり淋しく感じます。いろいろ医療にとって畏しい時代になりました。皆様によりしく

札幌市中央区南九条西六丁目

二―三十一―四〇七号

斎藤 成樹

（十三・十二・二〇）

編集後記

本誌の編集に関わるようになって十年が過ぎようとしています。毎年五月ごろに開かれる編集会議、診療が終わって顔を出すと煙草の煙の充滿する部屋の中で大久保洋平先生、上田智夫先生がにこにこしながらああだこうだと言いつつ合っています。加藤編集長は悠々と議事を進め三村先生は茶々を入れ、澤山先生はいつもおだやかな顔で会議を見守っています。

今年は原稿が集まるだろうか、ゴルフのことは、旅行のことは、座談会はどうしよう、追悼文は誰に頼もうかと話は行ったり来たりで気がつくとも時間は九時を過ぎていきます。やがて厄介な座談会の日が来てお酒を飲みながら最初は格調高く、やがて支離滅裂に、最後は村井先生が意味深に総括をされ座談会は終わります。この頃になるとボチボチと原稿も集まりだし、八月には脈のありそうな先生方に催促をして何とか忘年会には間に合わせようと事務局の高橋さんを拝み倒してこうして波久鳥の編集はおこなわれてきました。思い出してみますと一体私は何か役に立っていたのだろうかと思ひた

るものがあります。

昨年は親交会の行く末が定まらないまま本誌の発刊も見送らざるを得なかったのですが、たくさんの先生方よりお問い合わせをいただき本誌の果たしてきた役割を改めて知ることが出来ました。本年は有終の美を飾ろうと前号では見送った座談会を企画し多くの先生方より原稿を頂戴し最終号にふさわしい内容となったものと信じていたのですが上田先生、大久保先生にはまだまだとお叱りを受けるような気がしてなりません。

親交会は解散しましたが、波久鳥は室蘭市医師会の貴重な財産として今後も何らかの形で継承していこう、機会があれば不死鳥のごとくによりみがえろうという意志が巻頭言から読み取れます。いわゆる箱ものではない本誌のようなソフトウエアは目に見えないものではありませんが医師会の共同事業のひとつとして是非継続したいと思うのは新編集委員一同だけではないと信じます。今後いつになるかは明言できませんが波久鳥復刊のおりには再度絶大なるご支援をお願いして最終号の編集後記といたします。

(斉藤甲斐之助記)

「波久鳥」二十三号編集委員

三村 博通

斉藤 甲斐之助

角 哲雄

生田 茂夫

鴨井 清貴

開田 博之

堀尾 昌司

曾田 光彦

松村 茂樹

福永 純

吉井 大介

柳川 讓

親交会会誌 波久鳥

発行日 平成十五年十二月一日

発行所 室蘭市医師親交会

印刷所 室蘭印刷株式会社